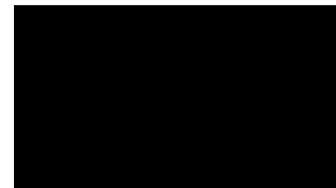


時 一九六九年十一月十五日

場所 西原善栄 区長宅

氏名現住所

仲宗根	謙吉
城間	ウト
仲宗根	カミ
城間	カマド
仲宗根	カマ
仲宗根	カメ
城間	セモ
仲宗根	ウト
西原	善栄



解説

西原善栄区長談。皆さんのお話をして聞きまして、わたしが翁長字についての特別のことを纏めとして話して見たいと思います。女子供をつれて行くことをいやがったことは、これははつきり翁長部落に残っているわけです。

と申しますのは、戦争が上原・棚原の線に来た場合ですね、一応下っているわけです。その場合、年寄（老人）と子供たちに対し、「あなたがたは、わたしたちが迎えに来ますから、壕でそのまま待つていて下さい」といって壮年者や青年が逃げました。この言葉は、表面的にはいい言葉であります。しかしほんとは、年寄や子供は邪魔だから、捕えられると殺されてしまうというアメリカ兵の前へ捨てて行ったわけです。

ところがこれがあべこべで、捨てられた年寄と子供たちは全部助かって、島尻へ下つて逃げ廻ったのはほとんどやられてしまいまし。七十歳以上、八十歳以上の爺さんお婆さんたちは元気で捕虜されました。米寿を祝われた方も、戦前と異らないでおりました。
ふかへふかへ例へ由へきして、お母さんは三十何歳で、お爺さんは五十何歳になつておりましたが、お母さんが十二歳以下の子供たちはお爺さんに預けて、連れに来るからといって下つたのです。それでおじいさんは、孫たちを守つて、みんな無事に助かりましてお爺さんに感謝しております。

若い連中が島尻へ下つて、弾の中をぐるぐる逃げ廻つて、結局死んだんです。それが影響しまして、西原村でも、青年会員が少いのは翁長だけです。戦後、若い者は十二、三名しか残つていなかつたのです。

それでおじいさんおばさんが三名壕に隠れると、アメリカ兵が、カマン、カマーといつておる、これ等は沖縄の方言も知つてゐる、わしはカマーという名だから出て見ようといつて、出て捕虜になつて、米兵から優遇された実話をあります（以下略）。

この区長さんの話に反して、仲宗根ウトさんの家族は七十六歳のおばあさんから誕生の乳呑み児まで、十名の家族が南部へ移動して戦火の中を追われている例もある。

翁長部落も戦争による人命の犠牲は、他の西原村の各部落と同様に多い。西原区長さんの調査によると、戦前戸数約百七十戸、その中一家全員が亡くなっているのが七十六戸、女一人か子供一人かが残っているのが十三戸、この二つを合すと、五十二%強である。戦前人口が約九百九十人となつてるので、一家全滅と一人だけ残つた戸数から見て、恐らく、生き残った住民は、四十%はいなかつた、あるいは三十%、九百九十人中、三百人ぐらいではなかつたかと思われる。

翁長部落の発展が他部落に較べて後れているのは一家全滅が多いので、土地の売買ができることが大きな原因になつてゐるとの話を聞いた。旧部落に空き屋敷の多いのは、部落を歩いてみるとわかる。

ここが、完全に戦争の禍いが無くなるということは永久にないだろうが、空き屋敷が一門の次男三男によつて解消し、形の上の戦禍は、もう二、三十年経つたら判らなくなり、人の目につかないだろう。しかし戦争未亡人、戦争孤児の悲しみは、生ある限りその人たちの胸の中から消えないだろう。

座談会出席人員が多かつたので、時間の制限もあって、あまりに大ざっぱになつた方がた、それはほとんど全員といつていいが、追録して貰つた。二度、三度追録、加録して貰つた方也有つた。

その都度、西原区長さんは、労を惜しまずお世話を頂いた。

仲宗根謙吉（三十九歳）防衛隊

はじめは浦添（村）仲間の小学校、それから、向こうから配属されて、首里の球部隊へ、そこは玉御殿の後ろの壕でしたが、わたしは在郷軍人ですから、炊事の係りをしていました。四個分隊の炊事班長しておつたもんですから、午前三時半頃、炊事に、ご飯炊きに行こうとしたら、防衛隊が手伝つてやるといいましたので、わたしは、夜マッチをつけたら、明りは敵からわかるので、マッチはつけなくていいよ、といひ聞かしてあったのですが、それを忘れて、たつたマッチ一本つけただけで、すぐに自撃されて艦砲が来て、わたしは足を取られてしまいました。四月十一日でした。

球部隊の壕へ行きましたと、わたしはこの四人に、壕の入口に置いてくれといつたんですがね、看護婦たちは、奥の方へ運べとしきりに寝かして担ついでくれました。同じ村のものたちですよ。この四人の中今は一人しか生きていません。二人は戦死して、一人は二、三年前に亡くなりました。

南風原の壕へ行きましたと、わたしはこの四人に、壕の入口に置いもんだから、病院へ送らないといかんもんだから、戦友四名で担架に寝かして担ついでくれました。それでもわたしは、いや、わたしは入口がい、水もここから奥へは持つて行くんだし、入り口の方がいいと頑張つて、そこにいることにしました。

そうしたらですね、ある日、一人の防衛隊が、わたしの寝台に足をぶらさげて腰を下して、「今日、この壕におる連中は、みんな水を飲まして、薬を飲ますということで、そこで待機しているよう

に命じられている」というので、わたしは、まずこの防衛隊がどこ
の者が訊いて見ました。首里、石嶺の喜屋武キヤンというものだという。
その人は現在も元気であります。

そうしたらこの喜屋武の兄さんも、お前はどこの者かと訊きました。

「わたしは西原の姉長の者です」といつたんですが、それな
ら、誰れも誰れも知っているといふのです。

「それで、わたしも毒を飲まされて死ぬんですね、わたしは一
日でも明るい世の中に生きのびたいからここから出して下さい」と
頼みました。

「しかし、そとは大雨だよ」というので、雨でもいいから出して
下さい、と頼んだんです。そうして背負って貰つて、壕のそとに出
ましたら、やはり豆粒みたいな大雨が降っていました。わたしは背
中から下された足がないので、泥の上に転んで、体中がまるで泥
でまぶしたようになつたんです。わたしは、生きられるだけ、生き
るんだと思って、それから、喜屋武キヤン（南風原村）、本部（同村）
を目標に野原の中を手で匍つて下つて、野原から夜が暮れるまでに
匍つて下つたから、そこの壕の中でご飯を食べてたので、わたし
は疵を受けてこんなにして来ているが、ご飯をくれませんかといつ
たら、向こうは、握り飯を一つつづて出しました。わたくしは雨
の中を匍つて来た泥んこの手で取つて食べました。

それでこの人たちがそのまま下つたがいいよ兄さんというの
で、それではここからはどこへ行くんですか、どこへ行けばいいで
すか、といったら、これから真直まっすぐ行つたら神里（南風原村）へも
目取真キヤン（大里村）へも行けるよというので、近い道も、匍つて行く
んですから遠いですよ。

そうして神里に行きましたから、神里の発動機（砂糖小屋か）の
ところに二、三日は隠れておりました。砂糖をつき起して、それを
食べていました。建物は閉めてありましたが、砂糖は、樽に詰めら
れてありました。

この砂糖をボロで包んで、背中にくくりつけて持つて、時どき水
で、その砂糖を溶かして食べて、ギーザバンタまで匍つて行つたわ
けです。

またわたしは、死んだ人の弁当や砂糖なども、ひもじくなれば、
さがして食べました。

具志頭村のところで、川にはみんなが水汲みに来るからというの
で、川に坐つていました。知つた人が来るだらうからと思つてで
した。そうしたら、小橋川（同じ西原村）のものですが、知つてい
るものが山羊をつぶしていましたよ。

それで、追うて行つて食べなければと思つて、煮えた頃に行つ
て、わたしにも山羊を一椀だけくれないと、わたくしたち
は、お前は知らない人だから、くれるわけにいかない、という。お
前は小橋川の人でわたしはよく知つておるよといつた。それでも、
いや、わたしは知らんからくれないという。それなら腹が空いてい
るから芋を一つくれないかといつたら、これも駄目だという。それ
では、一ついいから山羊の骨を一つしゃぶらしてくれないかと、
腹が空いていましたのでくいさがりました。今考えるとさもしいよ
うですが、その時は、それが当たり前でした。それもできないといつ
て、その上山羊の煮たのを隠すんですよ。それでわたしは、お前み
たいな者、わたしの家に来たら、うんと山羊をくれてやるよ、とい
った。

つてそこを去りました。
わたしは飛行機が飛ばなくなつたら、川をたよつて、知つた同じ
部落の者が来るだらうと、来たら生芋でも何でも貰おうと思つて、
川のそばにいました。

また与座・仲座で、人の牛小屋へ入つて、ここが死に場所だと思
つていたら、そこへ同じ鎌長出身の若い防衛隊の青年たちが二人や
つて来ました。そうしてこれ等から、あなたのおばさんがギーザバ
ンタにいるよ、と教えてくれました。どうしようか、ギーザバンタ
というところがどんなところか、どこであるかもわからないので、
困惑していたんですが、この二人がつれて行くといつて、これらが
つれて行つてくれまして、おばさんを呼んで来てくれました。

おばさんは、わたしが足を取られて無くなつてるので、もし破
傷風にでもなつては大変だといつて、ニンニクを沢山さがして来て
くれました。あんまり沢山つけて貰つたので、疵口がひりひり痛
みましたね。それでおばさんにつれられてギーザバンタへ行つたわけ
ですよ。

わたしは足がないから片隅に小さくなつて寝ていましたが、避難

の人は、やつて来ると前の方に坐るんですが、艦砲が引つ切りなし
に来ますから、やられるんです。そうしてつぎつぎとやられました
よ。それで、そういう死ぬ人の食糧をわたしは食べましたよ。この
ようにしてギーザバンタには、長くいました。おばさんというの
は、わたしの妻のおばさんです。この方がおられたので、わたし
は、足は切れて無くなつていても、命を助かることができました。
南風原の陸軍壕を出てからは、前に話しましたように野原の中を

下りてから、握り飯を一つ貰つて泥だらけの手で、そのまま掘んで
食べて、喜屋武・本部から神里へ行き、それから稻嶺・目取真・新城
（具志頭村）・船越・前川・具志頭村の役場の前、与座・仲座と
いうふうに通りました。

津嘉山の陸軍病院は、一号室から十五号室までありましたが、わ
たしは五号室で、大体疵が癒りかけました。

そこにはつぎつぎと負傷者が担ぎ込まれるので、首里や戦線の様子もよ
くわかりました。前田の線、西原の線が激戦で陥ちたとか、師範学
校が全部焼けて、ハンタン山のあの大きな赤木が全部焼けて、幹も
残らないとか、首里は、赤田までも全部家が焼けてしまつたとか、
話して聞かしました。それで壕の中だが戦争がどこまで来ていると
いうことや、どんな戦争が行なわれているということもわかりま
した。

わたしが壕を出てからギーザバンタに行くまで、匍つて歩いただ
けの日数は八日かかつっていましたね。

その時に艦砲は、どことなく激しかつたんですが、新城を出て、
具志頭の役所のところへ行く途中の野原を匍つて進んでいた時、低
空して飛行機が、わたしを目がけて機銃射撃をしました。幸いに
溝があつたのでそこへ転がり込んで助かりました。それから糸数部
落には野戦病院があることを知つて、行きました。そうした
ら、糸数の病院は解散になつて、無くなつて有りません。それでそ
こから与座・仲座の牛小屋を死に場所ときめて入つたわけでした

ギーザバンタには長らくいまして、おばさんも近くにいっしょでした。

が、同じ部落の、手を艦砲で取られたものといっしょになつて、二人で小屋をつくつていきました。あれは足はあるし片手はあるので、水を汲んだり、薪を取つたりします。わたしは足がないから炊事を坐つていてやるというふうにしていましたが、ある朝、この小屋が火をつけられたんですからね。「ああ、仲宗根さん、家焼かれておるが」といつてからね、そして手を切れたものは、歩いて逃げて捕虜取られるというんです。「それでは、わしはそのままにして置くか」といつてからね、「あなたは足がないから、わたしが助けることはできない」といつて、自分だけ片手あげてアメリカーのところへ行きました。そうすると間もなく、アメリカーが担架を持って来て助けたわけです。

それから港川へつれて行って、また与那原につれて行つた。それから与那原の浜から船に乗せて、泡瀬（美里村）の美東の学校へ。行つたらそこも満員で入れないもんだから中飛行場に。中飛行場に一週間いて、今度はまた知花（同村）に連れられて行つた。知花に二、三日いたら、七月の中旬頃、ハワイへつれられて行きました。船は真珠湾に入つて、それから海軍病院に収容されました。病院では、大へん親切に治療してくれましたし、食糧もよかったです。足が痺りましたので、ホノルルの前の砂島でテント生活を一年半やりましたが、そこも食事はよかつたです。砂島では、ホノルルで犬の鳴く声も鶏の鳴き声も聞こえました。

ハワイから帰りましたら、わたしの家内は死んでしまつておりません。子供たちは小さしい、こつちに避難して来た時は、大変苦労

でした。野原の蕪鉄ばかり食べました。

妻が死んだ所は惣慶（旧金武村）です。栄養失調で、食べるものが無いので、死んでしまつたんですね。

子供は、長女は学童疎開で本土へ行つていましたが、次女が数え年の一歳、長男が六歳、三女が三歳でした。

煙はあるんですが、わたしが足がないから十一になる子供が耕す

のですが、いくら一生懸命に耕すといつても、十一歳の子供では、ほんのちょっととずつしか耕すことができん。

わたくしは、足がないので、立つことができませんので、煙を耕すそうと思つても、できないのです。それで家にいて、食事をつくつてやつたり、小さい子供を見るようにしていました。

ところが、これではどうすることもできませんので、考えました。当時は、まだいろいろの薬莢がありましたが、足に当るものを見つけて、それを義足の代りにくつりつけて、それで烟に出て、耕すことになりました。それでずっと薬莢が義足代りで、やっていました。

義足になったのは、それからずいぶん長い年月が経つてからで、まだ六、七か年しかなりません。

妻が死んだのは惣慶ですが、子供たちは宜野座村の福山（旧金武村）にいたようです。妻も最初はいっしょに福山にいたんですね。

死んだのは惣慶だったんです。

ハワイへは一番最初であります。あつちに行くには腋毛も下の毛も全部剃られて行つたんですよ。

わたしたち負傷者は二階に一人ずつベッドであります。元気

のある者は船底でした。はじめはバケツに水を入れて来てですね、つぎは石鹼を持って来て、また剃刀も持つて来たんですからね。「さあ、大変なことになつた、皆、浴びせてから首を切る考え方だな」とみんな驚いていました。そうしてアメリカーたちは、こつちも剃れ、こつちも剃れといいましてね。

それでハワイへ行つた人たちはそうではなかつたが、後の人には、眉まで剃らされて、沖縄出でハワイへ着くまで、猿又も着けさせない。着ているものは全部海に捨てさせられたのもいて、憤慨している連中もいました。この裸組は七月の下旬ぐらいに来ていました。船底にみんな裸になつていたんだそうですよ。

それでいよいよ戦争になりまして、アメリカが攻めて來ても、他の人のように早く逃げることができません。みんなが小那覇の前に二つでした。わたしは十・十空襲の時から、肋膜炎にかかりましてずっと入院していました、戦争が始った頃もわたしはまだ体は恢復していませんでした、瘦せていました。

それでいよいよ戦争になりました、アメリカが攻めて來ても、他の人のように早く逃げることができません。みんなが小那覇の前に行つている時に、吳屋の前へ出てもいいからといって、ゆつくり行くほかはありませんでした。それは、わたしのが悪いのと、三人の子供が小さいので、お父さん（夫のこと）一人でいろいろと持ち物も持たねばならなかつたからでした。

城間ウト（三十二歳）主婦

わたしちは上の子が、当時七つで、次男が四つ、下の女の子が二つでした。わたしは十・十空襲の時から、肋膜炎にかかりましてずっと入院していました、戦争が始った頃もわたしはまだ体は恢復していませんでした、瘦せていました。

そこで來てから一週間ばかりたつてからでした。この世名城の区長さんという方が、うちのお父さんを防衛隊として連れ出しました。うちのお父さんはわたしと二つ違いで、まだ三十四歳で、若かったもんですから、防衛隊に取られたわけです。

これは、世名城の区長さんが廻つてはいましたが、近くの軍からの命令で、区長さんは、壇をあちこち廻つたり、人の家にいる避難民から若い人を見つけて、人を集めなければいけないように、命令されてやつっていましたんだそうです。

お父さんが防衛隊に取られたたら、すぐ艦砲が大変に激しくなりました。東門（とうがんじょう）の親子なんかここで怪我をしました。

そこへわたしの弟が来ました。「子供たちを守つていてるんだから、どこにも行かない方がいい、行かないように」というわけで

しかし、「わたしたちのところへ行くか、それともお父さんたちがいるところへ行くか」と訊きますので、「ええ、つれて行ってくれ」といました。「そうすると、あなたたちのお父さんが帰つて来た時に、まごつかんじやないかな」といいますので、「いいえ、それはどうもない、大丈夫だ」といつたんですが、弟は「やはり動かないようにしておれ、アメリカが来ても動かないようにしていいなさい」といつて、わたしたち親子だけ残して行きました。

艦砲が激しくなりましたので、五十人ぐらいここにいました船長の人たちは、わたしたち四人だけ残して、みんな逃げて行つてしましました。わたしはまだ体が立派に焼つていませんので、三人の子供等をつれて、みんなのように歩くことはできません。幸いなことに、兄弟が食糧を持って来て、不自由しませんでしたので、わたしたちは、ここに一月と何日ぐらいましたかね、長い聞いたわけでした。

ここでは親たちもあいましたから、何事もなくすぎましたが、とうとう親子四人、ここを出まして、何という部落でありますかな、一日一晩、泊りまして、それからまた先きの方へ行きましたが、そこは、水が沢山出ている川のあるところでした。そうです、高嶺といいました（旧高嶺村大里か与座ではなかつたらうか、水が沢山あるところというの）。

それで部落の人たちも、わたしたちを、ほつたらかして來たことを話していたんですね、わたしたちのお父さんが防衛隊からそへ來ていたので。それで、わたしたちは、偶然にも、ここでお父さんといつしょになりました。

それで部落の人たちも、わたしたちを、ほつたらかして來たことを話していたんですね、わたしたちのお父さんが防衛隊からそへ來ていたので。それで、わたしたちは、偶然にも、ここでお父さんといつしょになりました。

つたんですが、この若い青年は、そんなわたしの言うのを大して心に留めない様子で、子供を引っ担つぐと、ついていらっしゃいといって、さつさと前へ行きまして、丘の上に下してあつたですよ。捕虜取られる時は、どうにもならなくなっているので、長男に、セイコウ、手を高く上げなよといつて、捕虜取られたわけです。野原に集まれといふので、集まつたんですが、そこには戦車がありましたので、どうせこの戦車で轡き殺されるのだと思いました。

「セイコウ、お前は後になれ、お前が轡殺されるのを見ては、お母さんは死に切れない、お母さんから轡き殺されるからね」といつて長男を後に坐らしました。末っ子は背中で次男も後に坐らしてわたしは前に坐りました。ところがわたしの考えはまた変りました。「セイコウ、お母さんのそばに並んで坐りなさい。轡き殺されるなら、一しょの方がいいから、ここにおいでなさい」と並んで坐らしました。そうしたら、アメリカーは、「立つて、みんな立つて」、というんです。そうして糸満につれられて行きました。

糸満では女と男は別べつに分けましたが、わたしたちは男はいませんから、歩きながらもアメリカの兵隊が、へい、ベビー、へい、ベビーといつて、わたしが背中に負ぶつて、末っ子にお菓子などもくれました。わたしは子供に腹は空いていても何だかわからないから食べるなよ、といつてそれを食べさせないようにしました。毒が入つていて、くれてから殺すといつて噂でありましたので。

糸満からは、夜から、ハーバー、ハーバーして、車に乗せられて石川へつれられて行きました。石川へ行つて三日間は、煮た芋を一人について一斤ずつくれました。うちには小さい子供でありましたか

お父さんの防衛隊での仕事は、前線への弾薬運びだったそうです。

四十日ばかり弾薬運びをしたが、多くのいっしょに狩り集められたものが、弾薬の運搬中にやられたのに、疵一つしないで帰つて来ました。弾薬運びの防衛隊も、もうその頃は、バラバラになつて、解散みたいになつていたので、ここへお父さんは来ていたよう

であります。

一ヶ月と十日ばかり離れていっしょになつてから、二日後であります。われわれ一家のものは人の家の中にいて、長男のセイコウはわたしの後にいました。小さい子はわたしが負うておりました。お父さんは防衛隊で、毎ののぼしはうだいで、頭髪も大変のびていましたので、顔を剃りなさいということで、鏡と鋏を上げたので、髭を剃っていました。その時に艦砲が落ちまして、お父さんは頭をやられて即死でした。次男のエイキはお父さんの前におきました。お父さんは防衛隊で、ですが、かすり疵一つ受けません。それからわたしも破片でやられましたが、後にいた長男と、背中の末っ子はちつとも疵は受けませんでした。お父さんは、あツという声さえも立てないです、そのままでした。三十四歳でした。わたしより二つ上で。

そこから喜屋武岬の方へ行きましたが、わたしは末っ子を負ぶっていますし、四つになるエイキまで引きつれることもできません、負傷していましたので。それで知らない若い兄さんでしたが、下は猿又だけつけていた方がたまたま通りかかりましたので、その方に、兄さん、この子供を、あそこまで手を引っ張つて下さりませんかと頼みました。あつちで手間もさし上げますからと、わたしは言せんでした。

ら、それは多いぐらいがありました。

そこで、子供がハンカに糞りましたが、わたしたちは、着ける物は何にも持つていません。それで少しほはお金を持っていますから、食べるものは買わないで、着るもののが一番欲しかったので、着る物を作るために袋を買いました。

捕虜になつて來ている人には、沢山着る物を持っている人もいたのですが。大抵の人はそう不自由ないぐらいは持つていました。ところが配給の時はクジでやるんです。そうするとわたしは、クジには非常に弱くて、四、五回クジ引きがあつたが駄目でした。そういう着のみ着のままならまだいいのですが、わたしらちは、ぼろで体を隠しているだけ、何一つ持つてはいけないので。クジになると、沢山持つている人でも、欲しがつて、無い人にやろうとはしませんでした。

それでわたしは、班長さんにいいました。「班長さん、クジは引

かないで、みんなのお尻を捲くり上げて、それによつて配給をやつ下さいませんか」といつたんです。そうしたら班長は、「それはどういう意味ですか」と訊きました。「わたしは、こっちも綻びています、こっちも破けています。前だけは被われています、艦砲が食い残しのゾロースしか着てないから」といつたら、班長は、「城間さん、さあ、さあ、あなたから上げます。ご婦人のお尻を捲くり上げて見なくてもあなたの言葉だけでよくわかりました」といつて、下さいました。

わたしはその時ほんとに嬉しいやら哀しいやら、何ともいえぬ感じになりました。あの時のことは、今も忘れません。

わたしが、そういうふうにしましたので、班長さんもその時、こ

れは考え方だ、といわれて、クジ引きを保留されました。

わたしは石川で、食べる物は（配給だけでも）今まで困りませんでしたが、着る物だけは、全然持つていませんでしたので、ほんとに困りました。戦争中よりも、捕虜になつてからが、苦しい思いをしました。

それからわたしは、肋膜から引きつづいてずっと瘦せて、ほんの子供みたいな体になりましたから、川で水浴びの時は、七つになる長男の着物を借りて着て、長男と次男が浴びる間に自分の着物とズロースを洗つてかわかして、それがうす乾きいたら、着物もズロースも着るというようにして過ごしました。捕虜になつてからが、苦しい思いが多くありました。戦争中、兄弟が食べる物を持って来てくれていましたが、戦さのために五名兄弟を全部失いました。夫も失い、親も失い、もうわたしは、これら二人を見守られているのでありますよ（ここでは感情が迫つて、懸念声になる）。

末っ子は、栄養失調で、着るものもないで死んでしまいました。父も戦争で亡くなりましたし、男兄弟三人は兵隊に行つて三人とも戦死していなくなつてしましましたし、四十何日振りでいつしょになつたと思って喜んでいた夫は、どのように弾に当つて戦争に命を取られました。まだ三十四歳であります。わたしは二人の子供を見守つてゐるのであります（二人の子のことも涙声で繰り返して話された）。

仲宗根 力ミ（四十二歳）

わたしたちは、元の役場のそばの壕から、喜納小墓に来て、それ

から池田の壕へと出ました。兄弟近親たちばかりがいつしょになって、ほかの人たちは別べつに、池田に一泊しましたが、兵隊の機関銃なんかの音が聞こえましたので、戦さがもうここへ来ているのだということで、南風原村の与那瀬・宮城へ行つて、それから一夜の中に当銘・志多伯（東風平村）の兵隊の兵糧を入れてある壕に入つていたら、一晩だけは無理にいましたが、追われました。長剣を提げた兵隊が来て追い廻したので、部落の中に入つて行きました。瓦葺きの家がありましたので、そこに隠れておりましたが、稻福のカマドがここで手をたたき切られたから、それでたまたま（魂消）。壕はありませんから、竹垣の中にいて艦砲が落ちてやられましたが、この人は剛胆な女で、ちょっと怪我した、といつてました。ほんとは大変な怪我でしたので、兵隊が来て、治療につれて行きました。

わたしたちは、この志多伯の部落が、危くなりましたので、屋取りへ行くことにしました。道を通つて行くと艦砲が落ちますので、野原の中から通つて、その屋取りへ行つて、三夜いましたが、そこでもまた中城から来た娘さんが殺されました。わたしたちは、馬小屋にいました。この娘さんたちは、母屋にいましたが、この娘さん一人だけが死にました。

そこでここにもおられないということになつて、与座（旧高嶺村）の屋取りへ出ました。与座の屋取りへ行きましたら、また馬小屋に入りました。そこには、柔かい馬糞もありましたが、それも踏んずけて、そのまま入つておりましたよ。そこはまた、家主は、主人が防衛隊に取られて、お母さんと子供たちだけいましたが、その人だけが死にました。

わたしたちは、この志多伯の部落が、危くなりましたので、屋取りへ行くことにしました。道を通つて行くと艦砲が落ちますので、野原の中から通つて、その屋取りへ行つて、三夜いましたが、そこでもまた中城から来た娘さんが殺されました。わたしたちは、馬小屋にいました。この娘さんたちは、母屋にいましたが、この娘さん一人だけが死にました。

そこでここにもおられないということになつて、与座（旧高嶺村）の屋取りへ出ました。与座の屋取りへ行きましたら、また馬小屋に入りました。そこには、柔かい馬糞もありましたが、それも踏

つれて親の家に行きましたよ。その家のには、どこの人かわかりませんでしたが、避難民が大勢入つてしましました。この家に直撃が落ちまして、どこかの子供の足に当りましたので、ここにもいられないということになつて、またここからも出ました。

それで防衛隊のお父さんを訪ねて行きましたら、「わたしたちは津嘉山から米の運搬をしてるので、こつちは第一線になるから、こつちからは逃げていなさい、わたしもまたさがして行くから」といいました。

そういわれたので、与座工場のそばを通り、糸満の照屋（旧兼城村）といふところへ行きました。照屋の村中に入りましたら、わたしは十一歳になる長女をつれておりましたが、これがやられました。背中の上方から前方へ弾が飛び出しましたので、首の下から大きな穴になつて、空洞になつてしましました。これをわたしの兄弟が埋めてくれました。ここでは、同じ部落のほかの人たちも沢山やられましたが、わたしはこれをくわしく訊いたり見たりはできませんでした。自分でしか考えられませんからね。

それで持つている食べ物も、この小さいのが死んだので、そばに置いてあつたら、この食べ物は全部取られてしまつた。腰帯から何から。それでわたしは何も持つもののがなくなりました。兄弟たち、甥たち、姪たち、つれだつていつしょのものは沢山おりました。しかし、わたしは、家族はもう一人もいつしょではなくて、自分一人になったわけです。

お父さんも召集であります。長男も現役召集、次男も召集で、

わたしは死んだ十一歳の子供しかつれていませんでしたが、子供二人は山原疎開、羽地村へ疎開させてありました。

糸満照屋から糸洲の部落へ越えて行きましたが、そこでわたしの弟はやられてしまいました。それからは全部女ばかりで、一人も男はありません。女ばかりでありますから、どこへ行けばいいのかわからなくて、迷つてしましました。そうしてあつちの部落は、通りを石で塞いで人が歩かれれないようにしてありましたよ。わたしちは、もう女ばかりになりましたから誰もつれて行く人はいないんですね。それで、人が大勢行くところがいいところだ筈だから、人が沢山行くところへついて行こうね、といつて、福地の部落へ行きました。

そこでは、前には大きな広づばがありましたが、兵隊たちが寝っていました。それでわたしたちは、石垣の陰に、木の葉で被うて坐っていました。そうしたら、わたしたちの家隣りのお爺さんが、艦砲に当つてここで亡くなりました。

そこで捕虜取られることになりました。「戦さは負けいくさだから、みんな長い着物を着て出なさい。死にに行くんだから手拭を一つずつ頭に被つて出なさい」と誰がいうとなくそういういましたので、長い着物を着て、白い手拭を被つて出ましたら、アメリカが立つていました。壕の中に置いてある物を取りに行かしてくれと頼みましたが、アメリカーは、取りにやつてくれません。何一つもない着のみ着のままでつれて行かれました。

捕虜取られましたら、山の中から山の上に登つて、そこには石垣が残つていました。わたしたちは足が利きませんで歩くこともでき

ませんでしたが、男と女と、山の上で分けられて、男はこっちに、女はこっちにといつて、男は海の上で、女は山の上で死なず考えにちがいないから、みんな白い手拭を被りましょうと誰かがいったから、みな、「はい」といつて、もう死ぬものだと思い込んでいました。

そうしたら、座安・伊良波というところへつれて行かれました。甘蕉を切り倒した後の畑の中におることになりました。テントも何ありませんで、青天井の甘蕉畑の中です。それに悪いことは、一晩中雨が降りましたので、一晩中ずっと濡れ通しておりますが、夜が明けましたら、宜野湾の野嵩へつれて行かれました。

野嵩であちこちさがし廻りましたが、空家はどこにも見つかりません。捕虜がいっぱいましたので、またそこから比嘉・島袋につけられて行きました。そうしたら、そこで真白い薬（DDTのことらしい）を撒かれて、それから握り飯を一つづくられ、だれだちはどこへというふうに割り当てられて、そこで十四、五日くらしました。

ところが、また山原へつれられて行きました。行つたところは、何もない枯木山で、その山の中へつれて入れられたが、こっちから木の葉を折つて来る。あっちからも木の葉を折つて来て、そうしてその上に寝ておきました。福山というところの山の中でしたよ。それから後になつて、めいめいでカバー（テント）を張つて入れとすることで、カバーをくれることになりましたが、わたしたちは男一人もいない女ばかりでありますから、カバーは大変に重いのです。それで持つことができません。女ばかりでこの重いカバーを張

ることもできません。そんなふうでありますから、「こんなに苦しい思いをするよりは、あつちで死んでいた方がよかつた」という気持ちになることもたびたびありましたが、しかしみんな死にたくても死なれないで、生きているものという考え方になつたりして堪えていました。

このような考えは、時どき心の底から辛くなると浮び出るのであります。立場が悪かったので、その結果でもあつたと思います。

わたしたちの立場と、その立場では、十一歳になる長女一人しかつれていません。ほんとの家族は、十一歳になる長女一人しかつれていません。が、怪我をして、わたしの主人の弟、糸州で弾に当たったが、米満照屋での子を失いましたのでわたくし一人になりました。ですが、怪我をして、わたしの主人の弟、糸州で弾に当たって死んだその弟の長男をつれていました。この子は十五、六歳になつてましたので、十五、六歳の男の子がいる家族なら、この福山でもそうまく苦労しないで暮らされたのですね。十五、六歳の男の子は、食べ物でも、どこからかさがして来る、一番役に立つ年頃なのであります。ところが、わたしの主人の弟のその息子は年は十五、六になつていましたが、病人で、成育状態も七、八歳の子よりも悪く、ある種の不具の子で、西原の郷里へ帰りはしましたが、帰つて間もなく亡くなつたというような子供であったのです。

カバーが来るまでの十四、五日の間は、雨が降つても、木の葉を敷いた地べたに、わずかに木の下に木の枝などで体を隠して、ほとんど濡れているほかはありません。座つていると敷いている木の葉を伝わつてお尻が濡れるのでした。床があるわけではありませんか

ら、カバーを張つて後も、雨はしのいでも、敷いてある木の葉から漏れて、相變らず体にしみるのでありました。姉の怪我は重傷でありますので、動くことはできません。それで栄養失調にもなつておりました。こんな福山でありますたが、魚も売つていますし、蛸なども売つてはいるのでした。売るといっても、お金では売りませんよ。米や罐詰などと換えるのです。

米の配給は、お菓子罐詰（お菓子の入つた罐詰の空罐、一合は入らない）のいっぱいもくれません、一日分で。罐詰は家族が三人で人数が少ないので、開けて分けたものしか配給になりません。一度でも開けてないまるごとの罐詰を貰つたことはありませんでした。それでわたしは姉に粥を炊いてやつて、少しづつ米を畳めて、それで魚と換えて、煎じてやつたりして姉の栄養不良を直すようにしましたが、自分は、腹を帶で強くしめて、水だけ飲んでひもじい思いをこらえて暮しているという状態であります。

福山というところは芋もありません。ヨモギ摘みに行くには、麻袋は沢山ありましたから、それを持ってヨモギや木の芽を取りに行くわけですが、カンカン帽（ヘルメットのこと）を被つてているのは、全部巡查（CP、沖縄人）だけ、それで、「芋をあさつて来たのだろう、さあ、袋を見せて」といつて、中を見るのですよ。ほんの小さい芋でも二、三個入つていても取り上げました。持たして帰すことはしませんでしたよ、同じ沖縄人でありながら。でも福山というところは、芋さえありません。

芋蔓の葉を作業員が、自分たちの西原から持つて来たから、配給することになりました。芋蔓の葉は野菜といつて、一人で一本ずつ

ですから、わたしたちは三本三人分で貰いました。自分たちの村に行くと、芋蔓なんかいくらでもあって、稀れに食べるぐらいで、いい野菜物がいくらでもできるのがと思いましたよ。

鍋といつてもない、包丁といつてもない、鎌もない、何も持つていませんから苦労しました。そこですべての道具は、カンカラ（罐詰の食べがら）です。鍋の代りにも、お碗の代りにも、水汲みにも、すべてカンカラでしたよ。爪の立つ木の葉は、柔かいから食べられるといって、いろいろの木の葉を全部食べましたよ。

食い物はほんとに大変であります。カンパン、親指ぐらいのを二つか三つかずつ配給されたことありました。

それに着る物ですね、それはただ着ているものだけでありますので、本部へ、どんなものでもいいから、着る物を下さいとお願いをしました。そうしたら、ゴワゴワしたアメリカ兵の着る服ではなかつたでしようか、まるで袋みたいなだらだらしたもので、二つの足が片一方の方に入るようなものでありますよ。それを一人一枚ずつくれました。

福山というところには、われわれ翁長の人は女と子供ばかり送られていました。それで後になってから、自分の部落の男が面会に来るようになりましたので、わたしたちの翁長にも男が残っていたんだと、みんなが取り組んで、抱きついてわあわあみんな泣いて、わたしたちのこともやつて下さいよね、といつたりして。

福山のカバー住いは、七月から十二月頃までつづいて、それから長屋ができたと憶えていますが、福山での生活はだいぶ長かつたが、いよいよ西原へ帰るということになつたら、西原の方はアメリ

力兵が、女を乱暴するので家から出られないということで、それは福山は薪は沢山あるので、それを持って行こうということになつた。うちの隣りは年取ったお爺さんがいて、毎日やる仕事もないのに、罐詰箱に入るように薪木を切つて、荷づくりしてくれて、それで、薪を持って帰つた。水でもアメリカ兵の乱暴の話があつて持つて行つた。そうしたら、西原では、こんな沢山罐詰を持って来たかといつたんですよ。ところがそれが薪で、西原も薪はいくらでもあって、アメリカ兵のために家から出られないというのもデマでした。薪を持って行つたので、みんなに笑われました。戦争は泣いたり笑つたりでありますよ。

戦争が来たというので、翁長からいっしょに島尻へ出かけた人数（シンカ）は十人であります。その中四人が亡くなつて六人帰りましたが、弟子で福山でいっしょに暮したのは、西原へ帰つて間もなく死にました。戦争がないで、福山で栄養失調みたいにならなければ、死にまではしなかつたと思います。

わたしたちのお父さん（夫）は四十五歳になつていましたが、一番最初に防衛隊に取られまして、それからは一度もあいません。島尻の薪垣で亡くなつたと、いうことを人から聞かされました。くわしいことは全然わかりません。遺骨をさがすことができませんので、そのままあります。

長男は裕（ひろし）で、二十一歳の初年兵で、翁長を出てから、一度もあうことができませんでした。どこの隊で、どんな任務であつたかということも全然わかりませんでしたが、亡くなつた場所も分りません。お父さんとおなじことで、遺骨もありません。

わたくしたちは、お父さん（夫）はじめ、長男も次男も戦死しました。長女も糸満照屋でのような最期を遂げましたが、三男の信政はある時七歳で尋常一年生であります。それから次女のミツ子は五歳であります。この二人は、羽地村の方に疎開させてありました。

それで、わたしが西原へ帰つて後からであります。この二人は、この戦争から助かることができました。ウナイ（男の兄弟から女の姉妹をさしての呼び方）、ウキイ（女の姉妹から男の兄弟を指しての言葉）二人だけですよ。この二人の兄妹が元気にわたくしを見守つてくれています。二人とも孝行のものたちでありますから、二人に見守られておるのでありますよ（仲宗根さんは、この最後の二人の子供のことを話し出すと声がくもつて、終りには声がふるえていらっしゃいました）。

城間 カマド（三十三歳） 主婦

四月二十五日、前仲 小（屋号）のかめ子さんが、中上門 小（屋号）の次男の妻といっしょに来て、泉川小のお爺さんも亡くなつたよ、お前たちは子持ちだもの早く逃げなければいけないよと合図をしに来ましたので、それではちょっと待つてよ、いっしょに行

くからといったんですが、あなたたちは子持ちだし、準備が要る、戦争はここまで来ているというから、先になつて、早く準備をしてついて来なさいといつて行きました。それはちょうど夜半すぎでしたので、まあ夜明け前でした。

それですぐに準備をして、歩き出しまして運玉丘の後に来た時

次男三郎は十八歳であります。防衛隊に取られていました。これは、豊見城村の長堂で戦死したそうです。その時は、お父さんがいっしょであったそうで、それでお父さんが、立派に葬つてやつたので、その時に見た人がいまして、あれは遺骨も立派にありましたよ。

わたしたちのお父さん（夫）の、糸州で亡くなつた弟のほかに、弟が二人防衛隊に取られましたが、この二人も戦争で、どこで亡くなつたかどうどう帰つて来ませんでした。

わたしには弟が一人いましたが、これも防衛隊に取られて戦死してしまいました。どこで亡くなつたかわかりません。やはり遺骨もさがすことができませんでそのまであります。この弟には長男、次男、三男、四男まで子供は全部男ばかりであります。わたし達とは別べつに島尻へ越えて、四人の子供全部弾に当つて亡くなつてしましました。六人の家族で生き残つたのは弟の妻だけであります。

わたしたちのお父さん（夫）は次男で、男兄弟五人であります。が、長男兄さんは、その時ペルーでありますから今もあつちで元氣であります。姉も、怪我が癒つて、ペルーへ行かれるようになりますので、今はペルーであります。五人の男兄弟で四人までが沖縄の戦争で弾に当つて死んだわけであります。

は、夜が明けておりました。これだけ、五人の小さい子供たちでありますから、運玉丘の後で一夜は明かすことにして、そうして船越（？）のあつち何というんですか、友寄・山川です。そこで二夜明かして、またそれから、志多伯に一夜、また、薪垣の壕で三夜泊つて、それから兵隊がそこから出るようになつたから、真壁の壕へ行つて三日泊まりました。そうしたらまたこつちも兵隊に出るようと言われて、薪垣に越えることにして、薪垣へ歩き出しました。そうしたら次男が熱が出まして、困つていましたところ、友軍の兵隊さんがわたくしたちを見て、こんな沢山の子供たちだもの、ここに入りなさいといつて、薪垣の壕に入れてくれました。この薪垣の壕には、一月ばかりおりました。この薪垣の壕に入っています時、主人のお父さんが、栄養失調で急に亡なりました。

この薪垣の壕にもおられないから真栄平へ逃げようね、というごとになつて、真栄平に十五日ばかりいましたが、ここでまた、わたしの主人のおばさん、薪垣の壕で亡くなつたわたしの姑の女兄弟が、やはり栄養失調で急に亡なりました。

またここにもいられないということになつて、真壁・波平というところへ行きました。ここには三十日ばかりくらしました。

この波平で、わたしを生んだ母親とわたしの長男と次男の三人が直撃で、即死しました。その時、破片で、わたくしも疵を受けてしましました。左の股の内がわから入つて出ました。足の首上もこんなに、その時、破片でやられました。

註、股の方の疵もかなり大きく切つて反対に出ているような話

だが、足首の上は、もうちょっとのことで、足が切り取られる

いつたきわどい怪我の跡が残っている。

波平の壇の中に、わたしたち二十人のつれがおりました。防衛隊に行っている主人の長男兄さんの家族、わたしたちは次男ですが、三男の家族がいつしょになつて、二十人ばかりなつていました。

わたしの主人は、防衛隊に取られていませんでしたから、わたしは子持ちで、怪我もしていませんから、夫に、あなた一人しか食物を持つたりいろいろの物を持つものはいないのだから、隠れ隠れて、防衛隊に取られないようにして下さいといつて、隠れて脱がれていましたよ。星壕に入っていますと、防衛隊に取るためにさがしに来ますから、隠れていなさいといつて、わたしは隠れさせて、防衛隊にやらないように隠れさせていました。

波平でわたしたちは一月ばかりくらして、わたしの生み親と長男と次男というわたしに最も身近かな三人を失いました。わたし自身も酷い怪我を受けましたし、三男、四男、五男、この三人も怪我を受けました。

さあこれからどこへ行こうかといふことで摩文仁に行くことにしました。わたしは、お父さん(夫)に背負われて、子供たちは小さいのは親戚が負ふるしてくれました。

摩文仁の海ばたに星中くらしていました、「こっちに来い」といって捕虜取られました。

わたしは、お父さん(夫)に背負われて捕虜取られました。自分たちの親戚たちが、皆集まつて、捕虜取られました。兄や弟たちの妻たちと子供たち、わたしはお父さん(夫)におんぶされて、お父さんは、赤ん坊とわたしを負ふるして出ました。

お父さんは、「こっちに来い」と二世がいつて、わたしと子供たちは、お父さんと引き分かされて、お父さんはハワイへ、わたしたちは、この夜は、富里・当山へ。わたしは担架で運ばれまして、わたしの三男、四男、五男は、兄さんの子供たちが二人は負ふつて、一人は船越・前川の子供が負ふつてくれて、富里・当山でわたしは病院に入れられて、子供たちは別べつ、わたしのお父さんや姉さんが子供たちをつれて行ってくれました。

翌日わたしは、どんなにしても、子供たちは、身心一体だからという気持ちで、富里の病院から逃げ出しました。そうしたら、つかまつて百名の病院へ運ばれて行きました。同じ部落の翁長の人たちがいましたので、わたしは、こんなにして逃げて来たが、どうしたらいいだろう、子供たちはどこへ行ったのだろうと訊ねましたら、わたしたちのお父さんの姉さんたちは、志喜屋へ行つているということです。それでわたしは、志喜屋へ行きました。志喜屋へ行つたら、今度は、また久手堅へ行つたというんです。

わたしは杖をついて、百名から久手堅まで二日かかって行つてゐるだけです。最初の夜は百名の役所に一夜をすごして、またこっちは満員だから、あなたは入れて上げるわけにいきませんから帰りました。

志喜屋で、夜中に子供たちが泣いたので、はたの人たちは、親戚もいるだろう、連れて行つて治療させたらいいなどと、うるさがられまして、辛い思いをしました。

志喜屋にいるようになりました、くらしていました、ある日の

朝、十時頃に三男が、まるで、寝ているようにして、死んでしまつていました。死ぬような様子などちつともなくて、眠るようにして死んだのです。そうしたら、午後の三時頃に、また五男が死んでしまいました。これも兄、三男と同じに、消えるようにこと切れて、死んでしまつたのでした。この二人の子供は、親戚たちがまるで、死んでしまつたのでした。わたしは疵負うでいるので、ついて行くことをできませんでした。

わたしは、お父さんはどこへつれて行かれただらう、殺されはしなかったかしら、と思いながら、四男一人しか残つていないからこれだけは、生命が助かるようにと心の中でいつも考えていました。そして病院の人たちにも、この一人しか子供は残つていなから、何卒、これが生命を助けて下さい、この怪我も慈して下下さいとお願いをしました。これは、二人の子供が死んでから一月ばかり経つた後であります。わたしたちは、志喜屋の公民館にいましたが、それで栗を打つて貰いました。ブドー糖でありましたか、翌日わたしが目を醒まして見ましたら、また一人残つていた四男が死んでいたのでありました。

その時からわたしは、もう生きていても何の希望もないと思いました。区長さんがたもいつしょでありましたが、わたしは、ほんとに気が狂れたようになりました。

わたしが、ガジマルの下について、自分の心がおさめられない、狂人のようにしていますと、子供たちは、狂人きょうじんがいるといつて、石をわたしに投げました。わたしは考えました。きちがいのようにな

つていれば、気違ひといつて石も投げられるのは当たり前である。心を取り直して、生きられるだけ生きよう。イヒーアハア(ここでは心の中とは対反に何の心配もないように笑いはしゃぐ意)して、悲しさを心中を隠して生きられるだけ生きなければいけないと思いました。

まだ、四男と親子いつしょにいた時であります、わたしは、負傷して、食べるものもそうち満足にありませんから瘦せていましたので、はたの人たちは、お碗は別べつにわかしているだらうな、としきりにいつておりました。それは、わたしが痩せているので、肺結核になつていると、わたしを警戒しているわけがありました。

五人の男の子をわずか一、二ヶ月の間に死なしてしまい、生みの母も死なてしまい、夫の父やおばも亡くしたわたくしは、これを深く考えると、生きられないでの、悲しくはあつても生きられる間は生きようといふこと、生きていでくらしていかねばならないと考えて、生き抜くように心を励ました。これは、捕虜になつたのだからお父さん(夫)が帰つて来るかもしれないということも心の底にはあつたと思います。

それで知念の方から自分の部落へ帰りましたら、少しずつ畑を耕して、自分で、小屋を作つて、おりました。

そこへわたしのお父さん(夫)が、ハワイから帰つて来ましたので、いつしょに暮らすことになりました。

長男が十三歳、次男十一歳、わたしの生みの母といつしょに直撃で波平で即死しましたね。それから、三男と五男は、破傷風で、四男も怪我してやはり破傷風と栄養失調もいつしょになつて、志喜屋

で、それで五人の子供が亡くなってしまった。

夫の父、おば、それからわたしのお父さん（夫）は次男ですが、三男も防衛隊で亡くなつて、その三男の長男、次男、三男、三人の子供はみんな亡くなつて、残つたのはわたしの嫁姉と弟の妻だけです。

長男兄さんは防衛隊で亡くなりました。長男兄さんの家族は皆無事でありました。

仲宗根 カ マ（四十二歳）

壙は墓でありましたよ。上の毛（翁長部落の西、丘の一地域）というところに、わたしたちの祖先が掘つて作った墓がありますが、そこが壙がありました。

お父さん（夫のこと）が防衛隊に取られて、首里の金城というところへ出て行きました。長男が現役の兵隊に取られて出て行つていませんでした。

お父さんは、防衛隊に出来ます時に、わたしへ言いました。「他のことは何でもいいが、子供たちのことをよく見てくれ食べる物さえ食べていればいいから、心配しないで待つて下さいさい。わたしたちは、敵を敗れば、すぐに帰つて来るのだから、子供たちを立派に育てておいてくれね」と言いました。

それでわたしは、十八歳の長女を頭に、次女十四歳、次男十一歳、三女五歳の子供たちには、壙において、お父さんの言葉を忘れてはいけないといつでもそれを思つていまして、子供たちを守つて、

いよいよ出かけることになりました。わたしは、大きなザルに釜からお汁を沸かす小さい鍋、茶碗類をまず頭にのせ、右の横腹左の横腹、背中に食糧を持つことにしました。米は二升ぐらいでしたが、スリケン粉の移り袋をかねて用意してありました。これに澱粉、砂糖なども詰めて、ぶらんぶらんしないよう背中から胸へかけて紐でゆわえて、味噌も油も体中に食糧をくつけて持ちました。十八歳の長女は、みんなの着る物を、麻袋に詰め込んで持つた。十四歳の次女は五歳になる三女と菓籠を下げて、十一歳の次男は、澱粉を背中に持つましたが、すべつ持たれないといいましたから、筵に巻いて抱いで持つました。その日は四月二十二日でありますたが、四家族がいつしょになつて翁長を出ました。沢崎小が四名、うちが子供四名と自分と五名、こっち（同席のカメさん、屋号シチナ小）が四名、前の沢崎小が四名で、みんなで何になりますか、十七名ですね。

ヘンサ（現在の池田）をさして行きました。ヘンサへ行きますと、そこに止まることはできませんでしたので、首里へ行こうということになつて歩き出しました。わたくしたちの次男は、十一しかなつていませんでした。そういう場合は、わたしがそれも持つてやりました。

ヘンサを出て、首里へ行く時ですが、ヘンサを出て、そう遠くは歩かないところに、猿一本の裸で、体を曲げて道に死んでいる人がいました。疵は見られませんでしたので、銃弾でやられたのだろうと思いましたが、十一なる次男が、「お母さん、人が死んでおるよ」といいますので、少しでも驚きを軽くさせようと思って、「眠

自分の部落にいるわけでありますから、食べ物は満足に与えていました」

した。

そうして壙で過してしまったら、ウンドウ（隣り部落）というところへ敵が入つて来まして、ビュウン、ビュウンと小銃弾が自分の墓場に来ました。それからまた、壙装してあるもの（弾が来ました）、その壙装が焼けましたから、ここにはいられないといつて、同じ部落の下の方、「イリ大城小」というところの壙へ行きました。そうしたらそこで二、三軒の家族がいっしょになりました。わたしは鶏がいましたし、豚肉もありましたので、それをごつた煮して、みんなに上げたりもしました。そしてここで悠ゆううつできるな、と思つていました。

けれどもわたしちは、「今晚だけは、ここに休まして下さいませんか、雨も相當に降りますし、子供等が可哀想でありますのでお願いいたします」といいました。そうしたら「こっちは戦場になるのだから、早く出て行け」といいました。

それでわたしは、沢崎小のお父さんと二人いっしょに（子供等もいつしょということがあとの話でわかる）自分の墓場に戻つて行つて、雨の中を行く準備をしました。傘、南京米袋、カマス、柔道着がありましたのでそれも、おののの被らせるにしました。

首里のナゲーラというところの下に空き屋がありましたので、そこに避難して一夜泊りました。出て行つて、芋を畑から掘つて来て煮てくれましたが、ここから長堂というところの甘蔗畑の中に一軒家があるところから道を出て、首里の金城の壙へ行くことにしました。そうしましたら、あちこちに、友軍の兵隊さんが守つて立っていましたので、わたしは、兵隊さんを見る度びに、「兵隊さん、ご苦労さんで御座います」と挨拶して通りました。そうすると兵隊さんの中には、「おばさん方はどちらへ御出ですか」と訊いてくれる方がありました。「われわれは、どこへ行くという当てもなくて、戦争に迫られて逃げて行くのですよ」といつたら、「それは、どこの道は行かないで、どこの方へ行きなさい、どこの危いですから」と親切に教えてくれました。

首里金城といいましたが、戦争に出た兵隊さんの空き壙がありましたので、そこへ入り込んで、芋を掘つて来て、十人余りのものが芋を煮て食べました。

そこにいましたら戦さが押し寄せて來たようなカチカチする音がしましたので、恐くなつて、大変だということで、そこを出て、製糖工場のある何といいましたかね、高嶺村です、そこへ晩の五時頃、明るい中につきました。高嶺村へ来る途中に、艦砲射撃はあり

ませんでした。木の下に石垣がありましたが、石垣の間に夜が明け
るまで、子供たちもみんないつしよになりました。

それからこの壕では、敵が泊高橋から上陸するということでおもて、彈幕でございました。そこは安全なところだといって、三十何日ですか、四十日近く暮らしていました。そこでは、うちの長女と次女ともう一人、三人が五十人余りの数の代表として、軍のいろいろの裁縫などの作業に毎日出ていました。この作業に出るなら壕に入れて置くという相談でもありました。

したが、こっちへみんな来いといいまして、高嶺村の山の上の山部隊の壕の方へ呼んでくれました。一晩は、兵隊の壕の下に長屋がありましたして、そこに泊りました。上の壕は兵隊さんは戦地へ出てガラガラになっている壕でありましたが、そこへ入り込ましてくれました。そこは安全なところだといって、三十何日ですか、四十日近く暮らしていました。そこでは、うちの長女と次女ともう一人、三人が五十人余りの数の代表として、軍のいろいろの裁縫などの作業に毎日出ていました。この作業に出るなら壕に入れて置くという相談でもありました。

を馬車に運ぶという作業がありまして、わたしも若い娘等と頭にのつけて、馬車へ弾丸運びました。
そうしましたら、高嶺村の山部隊の兵隊さんが、今、西原から戦争をすまして、交代になつて帰つて来るからというので、出て行け、といいましたから、「はい」といつて、出て、具志頭へ行こうね、具志頭へ、兵隊でいっしょの東り仲（屋号）といふところだが、友達がおるからというので、そこへ行くことにしました。波名城部落を越え、具志頭同字（ドウマツ）といふところで何日でしたかな、暮しましたから、そこで、小さい壇のそばの屋敷の中の山の中で凝装して、いろいろ作つたりして五十人の人数が入つていましたが、男はいませんでしたよ。

たがれからしません。わたしたち二ところ（ナニカニ）はなにましたから、あつちも子供をつれておるし、わたしも子供をつれておる。道もこの年なるまでこんな遠い島尻というところは、来たこともありますから、わたしたち二ところ残されましたので、どこへ行くかねと心配しましたが、皆が歩くところへどんどん歩いて行けといふことで、これから具志頭同字からまた後戻りして、玻名城の部落へ越えた。そこから山道でしたが、その山道は何といいましたかわかりませんが、山道を越えた。そこに岩がありましたので、その岩の下に体をよせて、雨はちゃんちゃん（しどと降りより強く降っている意味らしい）降りますが、これから粗袴を捨集めて来て、子供たちに物を煮てやつた。そうしていましたところ、人が来て近くに呉屋の人人が殺されているといいましたから、「ああ、ここにもそれではいられない」と思いながら一日はここで暮らしました。

いけないなと、今度は真壁へ越しました。ゆっくりめぐり、沢山人が行くところへ歩いて行きましたところ、真壁へ着きました。こっちに島（同じ部落）の人で、新高良小のお母さんがおられましたよ、こっちは事務所でしたよ。「お母さん、わたしたちもここで入ることができますかな。」といいましたら、「入れないよ、わたしはこんなに戸口に坐っているのだから、お前たちは前に歩いて行きなさい、こっちは危いよ」といいましたので、「そうですか」といつて歩いて行って、伊敷の部落へ越えましたよ。真壁から

そうして入っていたら、今度は、この山の中へ兵隊さんが一人入って来て、「どうですね、おばさん」といましたから、「山の中は飛行機も通らないで安全ですよ兵隊さん」といましたら「ああ、そうか」といつて、ちょっとおらなくなつたと思つたら、大勢の兵隊が出て来て、「お前等は出て行け、お前等はここにいてはいけない」というので、兵隊は大変恐いのでありますから、「ああ、そうですか」といつて出て行つたら、そこに家がありましたよ。家の主は山の中へ行つていたので、溢れるばかりにいっぱい避難民が入つていました。入つてしまつたら与那原の人でありますたが、お爺さんが、家の真中に坐つていますと、弾が脅部に当りました。

それでここもいけないな、と思って、それからイリン城イリントン（屋号）のおとうさん、沢崎小のおとうさん、この二人が男で、ほかはみんな女でありましたが、この二人が、「一時はこっちの部落にわたしたちは住んでおるから」といいましたから、「それではわたしたちは捨てて行くのお父さんたち」といいましたら、「いや捨てはしないよ、突破する時はいっしょに行くから、その時には呼びに行くから心配しないでいなさい」といいましたので、「そうでありますか」といまして、そのつもりで女ばかりになつていました。

そうすると、誰がいうとなく、「ここは大変になるぞ、港川から敵が上陸して来るぞ、アメリカが来るぞ」ということになりましたので、これから荷物もつくつて出て行きました。そこから行きましたらなあ、具志頭から後戻りして、港川から上陸したといいましたので、男たちは逃げて行つたというよりも離ればなれになつたといふことになりましたので、わたしたちは五十名の人数がどこに行つ

いましたか、その屋敷へ入って、山羊小屋でしたよ、この山羊小屋に筵を敷いて、子供たちを休ました。

この芋で、芋りがシーア作りました。

増で味だけはつけ、空腹を凌ぐといったみじめな生命を保つ智恵

から出たものであった。地方の地主などでは、下男下女には、それをくれる慣習もあると聞いた記憶もある。

この（同席のカメさん）お母さんは、乳呑み子をつれていますから、芋を取りに行くことができません。それでお椀二つに入れて、四人で分けて食べなさい、といつて上げて、またうちの方も碗の三、四分ぐらいずつ分けてくれました。ウムワカシーは、芋蔓の葉を入れて、その時まで少し味噌を持っていましたので、味はつけることができました。

ところがわたしのところの次男坊は、芋をくれたことがなくて、いつでもご飯をくれていましたので、芋をくれると泣くのです。それで、わたしは、柄を取り去った柄杓をお釜がわりにしていましたので、それに米を一合入れて炊いて、それを片手で小さく握ってみんなにも分けてやりました。これまでこの次男坊のために、柄杓をお釜にして、飯を炊いて、ずっと食べさせて来ました。

食べ物について申しますと、自分たちの墓に、沢山、澱粉から砂糖、味噌、塩、脂など準備してありました。そうして、お母さんがいっしょであれば心配はないが、若しも別れわかれになつた場合には、何よりも食べ物だからといって、澱粉と砂糖だけは、自分じぶんにも持たして、水に溶かして食べることも教えてありました。そうして最初にお話ししましたように、わたしは体中に食べ物をくくりつけて来たわけですが、高嶺の壇には四十日近くもいましたし、二か月近くもこんなにして歩きましたから、持っていたものは、もう全部無くなりました。それで、畑に出て芋でもさがすほ

かはなくなつたのであります。

わたくしたちがいた山羊小屋のあった家は、真壁から來た道に沿うて右がわになつていました。家は茅葺きでありましたが、上の家と下の家と二つくつついで、二つの家のくつつくところには樋いがあるの昔よくあつた作り方の家で、上の家は一番座と二番座の仏壇の間、下の家は三番座と土間の奥に竈があつてその後には火の神の石が三つ並べてあるような家であります。その二つの家は屋敷の中央部にありましたが、わたしたちのいた山羊小屋は、真壁から來たすぐの隅に近く道と低い石垣のそばにあつたわけでした。

この茅葺の二つの家には、あちこちの人がいっぱい溢れていました。棚原の人なんかもおりました。屋敷内には、家のそにも、沢山、あちこちに人がおりましたが、わたくしたちのいた、母家の裏の方には、避難民はいませんでした。

そうしてわたしたちが山羊小屋にいましたら、急に、この家、屋敷へ艦砲が落ちはじめました。わたしは、これは大変だと思って、反対がわの向こうの木の下が明るくなつていましたので、子供たちは、「ここは危いから、さあ、あっちへ行くからついて来いよ」、

といいまして、五つになる子を小腋に引っ抱かえて、子供たちもいっしょに、移りました。十四になる次女と五つなる子供と、後喜納小の四男と、これ等をつれて行つたのですが、わたしは、この四男の手を引いていました。それで明るいところへ行きましたら、後喜納小の四男になつっていました。五つなる子をつれていますので、あわてているのですから、自分の十一になつてゐる子供と思つたら、人の子供になつていたわけです。後喜納小の四男の手を引いて、自分の十一になる次男は逃がしてしまつていたのです。この十一になる次男も手を取つて最初はつれて來ていたのを、これはゆるして逃がしてしまつて、他人の子供を自分の子供と思つて手を取つていたわけでしたよ。

長女は、艦砲が恐くて山羊小屋に体を縮めていたのであつたでしょ、「姉さんよう、姉さんよう」と呼びながら駆けて来る弟が、やられたことがわかつて、わたしより先に走り出で次男をかき抱いていました。

そうしてわたしは、「つる子よ、つる子よ（長女の名）」と呼びながら行きますと、次男は、そこにたたき切られてしまつていますのよね、それでかき抱きましたら、もう体はだれてしまつて、即死していましたのでありました。即死でありますからすぐ冷たくはありません。それまでは、非常に意地（勇気）強く子供たちに食べ物もくれて、元気よくやつて来ましたのに、それからは心がひるんで、「こんな大事な次男坊を亡くして、わたしはどうして、お父さんに返答するかなあ」と絶えずそればかり考えていました。

それで長男は兵隊に行っていますよね、この次男はお父さんが大変に可愛いがつてゐる息子でした。それでわたしはそれから、お父さんへどうして返答したらいいかな、とそれからは心の置き場もありません。それまでは、非常に意地（勇気）強く子供たちに食べ物しかなつていませんから抱きかかえて行つて、自分で葬りました。それから、その後で母屋の方へわたしは行つて見ました。この家にいた人たちのことですが、自分たちと同じ翁長の人で、三男糸数（屋号）のお父さんもこの二つの家の下の方におられましたが、股から整ち飛ばされて、いましたよ。そうしてその片足が、竈の後に飛んで行つてみました。それでも生きておられまして、「助けて頂だいよ」と呼び叫んでいましたが、わたしは心中で、「助けてくれとおっしゃつても、もう助けることはできませんねえお父さん、戦争でありますから、諦めまして、安らかにお眠り下さいね」と祈りました。

十四になる女の子は、おとなしく木の陰にいたのですが、次男

が、この三男は防衛隊に取られていましたので首里戦線で弾運びや

切り込みにも行つたというので、首に怪我をしまして、負傷したから、偶然にいっしょになつて、それで首の疵もほとんどよくなつていましたが、ここで、肩の方を無茶苦茶に打ち砕かれて、（同席のカメさんは、肩甲骨が肩の方へつき裂かれていたと言つた）亡くなつてしましました。

三男糸数のお父さんは、まだ生きていましたが、男の人二人で担架にのつけて、壕につれて行きました。それで、わたしは生きているのだから、担いでいる人の名を訊ねておかなければと思って、「おじさん、あなたはどこの方ですか」とときましたら、「わたしは奥屋の上互儀（屋号）の三男ありますよ」「こっちのおじさんはどこの方ありますか」とときましたら、「わたしは首里汀志良次のクラガ屋（屋号）のヘンサから来ているのですから見覚えをおいて下さい」といいました。

それで今度は戦争が終つてから、訪ねて行きましたら、奥屋の上与儀の三男おじさんも、首里汀志良次のクラガ屋の方も、二人ともその後で戦争で亡くなつてしまつたそうであります。

それから上の家ですね、棚原の中安座間（屋号）のおばあさんと、また徳佐田のスレーデーク小（屋号）のおじいさんと二人の方、庭先の戸口ですよ、二人頬被りして戸口に寝ていられたのに、このままお二人頬被りしたまま、何事もなく死んでいられましたよ。わたしたちいっしょだった人数の中では、これだけ亡くなつています。この屋敷いっぱいそこに住んでいる全部、直撃で死にましたよ。

たかもしけません。それでわたしの長女は、「お父さん、お母さんおはじめみんなお元気であられましたか」と親しく挨拶をしましたら、「ツル子も元気でしたか」と三良スージナーのお父さんが、自分分の長男の嫁になるわたしの長女へ特に、かあい心をこめて言つていられました。

それではいっしょに歩きましようね、といつて、そうして人の屋敷内のそばで、木の生えているところで、ずらつと一、二、三、四と並んで坐つていました。そうしましたら、この三良スージナーのお父さんの顔に弾が当りました、えーという声も出しません。ただ居眠りしまして、そうして引っくり返りましたので、それからみんなドマングヤー（たまげて、動転して）このお父さんをそのままにして、そこから出て行って、反対がわの前へ出ました。糸州の前の方は東でようか、その端っこに出ましたら、そこは、人がいっぱい入つていましてわたしたちの入るところがありませんので、石垣のそばに坐つて、今度はどこへ行くかなと考えました。三良スージナーのお父さんがいなくなりましたから、全部女子供ばかりになりました。

それでまた伊敷の部落へ行こうということになつて行きましたが、部落のはしづこまで行きましたら、やっぱり激しいので、入るのが恐くなりまして、荷物を頭から下して休んでから、また糸州の部落へ行きました。糸州の部落のはしづこまで行きますと、やはり入ることが恐くなつて、荷物を下して考へて、また行くところがあれませんから、伊敷の方へ同じ道を歩きました。このように十回ばかり同じ道をトンモドヤー（往復）して糸州に行つた時にもう夜が

一人は女の子がおりましたが、この娘は手を怪我していましたが、これは今も元気であります。翁長の人ではなく棚原の人です。

どこのおばあさんかわかりませんでしたが、この人は口に当りましてね、弾が口からずっと喉へ入つていつたようで、ぶらぶらして歩く格好をしましたが、口が両頬も裂けて、物を言うことはできませんでしたが、口をハアフウ、ハアフウして、何か言おうとでもしていたせんが、口をハアフウ、ハアフウして、何か言おうとでもしていたんですかね、手は、指を開いて、掌を内の方に向けて口の前で、裸にして、それが非常に氣味悪く見えましたが、その人はすぐ死んだはずです。多分喉に破片が入つていたのではなかつたでしょうか。三度、落ちましたから、そとにいたのもほとんど死んでしまつていました。

またこつち（同席のカメさん）の三男は大きかつたんですが、わたしに負んぶさせなさいといつて、わたしが負んぶして、子供等が足を持って運びまして、わたしの次男を葬つたところに二人並べて葬りました。

「負けいくさであるのだから、諦めて、安らかに眠つていいなさいね、わたしたちは、しがれるだけはしのいで見るから。何もくよく知らないで諦めて眠つていいなさいね」

このように手を合して言ってから、そのまま捨てて、それから伊敷の部落から、糸数の部落の方へ歩いて行きました。糸数の部落に越えましたら、今度は三良スジナ（屋号）の家族に行き逢いました。そして、「元気でしたか」と互に言い合いました。わたしの長女と、この三良スージナーの防衛隊に取られている長男とは許婚でありまして、戦争さえないと、もういっしょになつてゐる仲であつた。

明けました。仕方ないので、石垣のそばにみんな体をくつつけて一日は過して、五時頃になりましたから飛行機も無くなつたので、糸州の部落から前に越えることにして、そこは何という部落ですかね、糸州の前の突き当たりの壕です。そこは野原がありましたから、何というところが訊きませんでしたよ。隧道から通つて、蘇鉄が生えていましたから、野原ですよね。山とはちがつたモウ（原野）の中で、子供たちは筵など被せて、一晩はそこに泊らして、それから部落の中を行つて、そこにはガジマルが生えてありましたよ。そこに子供たちを休ましてから、またそれから喜屋武・福地というところに行きました。

註、糸州部落の東といつてるので、多分波平部落へ迂廻しているのであるが、夜分だから方角がよくわからなくて、糸州・波平・福地が、直線路にあるような錯覚をしていたのではないかと思われる。

そのタンクのそばから、子供等が泣き叫んでいる声が聞えました。最初は、「お母さんよう」と繰り返して呼びながら泣いていました。

そのタンクのそばから、子供等が泣き叫んでいる声が聞えました。最初は、「お母さんよう」と繰り返して呼びながら泣いていましたが、それにつづいて、「棚原のおばさんよ、わたしたちはどう

なりますか」と繰り返しながら泣くのです。それでわたしは、わたしたちの酋長にも、棚原という者がありますので、その家族か近親ではないかと思って、行って見ましたよ。そうしたら、わたしたちの知らない人でしたが、子供たちは、十一歳ぐらいが上で、女の子が二人、男の子一人の三人でした。お母さんようを繰り返して呼ぶと、棚原のおばさんよう、ああ、わたしたちはどうなりますか、と口ぐちに泣き叫ぶさまは、テンサマケーリテ（泣き叫けん

で、前後もわからないようになっている有様のことをそういうそぞろ言ひました。そうして、タンクの中に、この子たちの母親かどうかはしりませんが、女人人が死んでおりましたよ。水はなくて、一個だけのタンクでしたよ。

わたしらちは、この瓦葺きの家で物を煮て食べましたからね。それまでは物はありましたが、あっちに行きましたら食べ物もなくなりまして、自分の芋蔓を持っておりましたから、それと芋蔓の葉を取つて来て、水炊きにしまして、あっちにもこっちにも食べさせておりました。炊事するところは、この瓦葺きの家の、そこは主もいませんでした。下しも（一番座、二番座、下の座、つぎが土間、農漁村の大

きい家は大抵、戦前はそういう様式であった）の方は大へん広かつたんですね。この中にみんな入り込んで、それから床下もあいていますよね、そりして一度は、自分の子供等に食べさせようと思つて、芋蔓の葉を取つて来て、少しばかりの芋蔓を入れて、煮ましてね、鍋は熱いですね、それを石を三つ並べて作った竈から下して、何か鍋取りはないかと、ちよと目をはなしましたら、床の下から匂い出て来て、さっと取られましたよ。これは男でありますよ。

で散らされて、みんなが浴びました。
註、同席のカメさんが、ジー・アンダ（脳味噌のこと）があんまり着物中に沿ひたので、その着物をそこに脱ぎ捨てたと、口を捕んだ。随分悽惨な光景であったと推察された。

その時に、次男喜納小のお爺さんとそこのお嫁さん、それから三

男スージナーの三男と三人がいつしょにやられましたよ。それから

いつしょにいた幸地部落の家族で、十三、四歳ぐらいになっていた

男の子もやられました。

それでわたしたちのいつしょの連中から四人やられましたから、四人を並べて寝かして葬りました。

捕虜になる時は、アメリカーといふものはこれまで見たこともありませんでしたよ。そのアメリカーといふものは、山羊の目、山羊の目（目が山羊と似た人間という意味）といいますが、どんなものかわかりません。急にまあそこへ来たから、そして壕の外に出で行きましたらこっちにも列をつくっております。あっちにも列をつくておりますし、目を大きくまたたきもしないで見張つてですよ。アメリカーがおりますよ。銃を前にして、煙にどこにも立つていますから、今度はもう後にアメリカーが来ておるから、親子三人、小さい子を負ぶつてから逃げようね、と自分は考えていましたよ。アメリカーに取られる、耳を切られるかわからない、足を切られるかわからないから、逃げようねと思つていましたが、いつしょの人びとから、もうみんないつしょだから、どうもないから心配はするなよ、といわれました。

しかし逃げられるなら逃げる考え方でありますよ。恐いですよ

床下は人がいっぱい入つていましたからね。瓦葺きの家の床はいいですね、女も男も沢山入つてます。艦砲をよけるのには、床の上にもいっぱい人がいますが、床の下が安全だというので床の下に大勢いたのです。女なら自分で炊いて食べるが、男だから出て来て、待ち受けていて、鍋もろともに取るんです。これを取られたのでわたしは、大変なことになつたな、どうすればいいかなと困つてしましました。

わたしたちがいたところは、その家の石垣を背にして、ずらつと並んで、坐つて足を前にのばしたりして眠つていました。

それで三良スージナーの残つてゐる人数、女の子二人男の子二人とお母さんとですね、三良スージナーのお母さんは、わたしたちより三つ下でしたからその時は三十九歳になつていました。三男は幾つぐらいになつていましたかな、十二歳ぐらいではなかつたかと思ひます。四男は五歳になつていました。上の女の子は十歳、つぎの女の子は八歳でした。

わたくしたちは、伊敷で次男は亡くなつてますよね、それで四人になつていました。わたしに、長女、十四歳の次女、五歳の三女ですね。

それからこのカメさんの家族と、ここで次男喜納小（屋号）の家族もいつしょになつて、幸地の人も、家の名はわかりませんがいつしょになりました。

そうしていましたら、左の方から弾が来てわたしの長女の頭に当りました。ポコッという音がしましたが、それと同時に引つくり返りました。顔が無くなつて分らなくなつていましたが、脳味噌が弾

ね。囮まれて出ましたら、ああ、どうにもならない、逃げることはできなかつたな、アメリカーは、あっちにもこっちにも列を組んでおるのにと自分の心をとりなおした。自分たちの連中はいつしょだなと思って、三良スージナーの親子、また与那城の兄弟組あにおかどくでしたよね、こっち（カメさん）の家族が四人なつてます。こっち（カメさん）は病院へ行きましたからいつしょではありません。これだけがこうしていつしょになりまして、上に登りました。捕虜は大変大勢で、アメリカーが前へ進め前へ進めといいましたから、前に進んで行つて、座安・伊良波いりはというところの畠の真中に置いて、一日大雨が降り通じて、六月二十二日でありますよ。覚えていませんよ、捕虜取られましたから。出て行く時今日は何日なつているかなといつて、四月二十二日でしたよ。捕虜取られる時は六月の二十二日ちょうど二ヶ月だなといつて、そうして考えていましたが、福地から座安・伊良波までは、歩け、歩け言われて、歩いていると人間がだんだん多くなつて、大変な行列になつておりましたよ。それで道も知らないのでありますから、みんなが歩くところへ歩くのだと歩いて、座安・伊良波へ行きました。

座安・伊良波では、アメリカーが、進んで行くものに饅詰を一人について一つずつくれてありました。この夜は大変な大雨が降つていましたが、この饅詰も開けて食べてています。ずっとひもじくしていると人間がだんだん多くなつて、大変な行列になつておりました。それで道も知らないのでありますから、みんなが歩くところへ歩いて着物を被つて、親子三人すくんで（うずくまるること）いましたが、まあこうしてテントも作つて中に入れないので、雨にこのよ

うにして濡らすんだもの、弾には当らなかつたが、子供たちよ、死ぬのだなど泣きながら、三人のもの顔をくつつけ合つてその一夜暮しました。

そうして翌日はなりましたら車で里謫へ行きました。里謫にはまだいっぱいして入らなくなっていて、それからまた普天間へ廻つて比嘉・島袋とこうところへ着きましたら、そこは水もありません。もう赤虫（水溜りに湧き出る木綿絲ぐらいの細長い虫）の浮いている水を金ボール（罐詰の空き罐）に汲んで来て、こうして澄まして飲ましたら、子供等はみんな栄養不良、下痢しつづけて便所ばかり行つて仕方ありません。比嘉・島袋の水は、稻植えである田があるでしよう、田の水は飲ましませんでしたよ。それでサイダー瓶を持って、人の家に入つて行つた。人の家には避難民がおりましたよ。サイダー瓶のいっぱい井戸の水売つて下さいといいましたら、売りもしない、れもしない、と言つていますよね。ハーナー（感嘆詞、それは何んとまあ、といった意味に近い、嘆声）売りもしない、くれもしない、わたしたちの部落では、水なら分けて飲むものだが、戦さ世であればおさらそうであるが、売りもしない、くれもしないということであれば、もう、いいだろうよと、いいました。比嘉・島袋について何日ぐらいしてからでありましたか、ずっと遠いインヌミ屋取り（復員者の収容所で当時よく知られていた）というところまで、一升瓶持つて行つて、汲んでですよ、ずっと行きましたよ。

比嘉・島袋にはアント作って、そこにはレコードを入れていました。そこには一ヶ月ばかり収容されていました。井戸の水を売りも

から、そうして茶碗を持って来て、わたしにも茶碗^{ぢゃわん}、茶碗^{ぢゃわん}、
いっぱい、言いましたので、ひとりで飲んでもいけないと思って、
みんなにわけて飲ましたから、一升瓶はバアなつて無いですよ
ね。全部飲まして無いんです。いやとは言われませんよね。それか
らもう一回布品敷に包んで行って、昼は山の中に隠して置いて、夜
になってから持つて来て、そうして並びに那覇の安座間のスチーデー
ク小(屋弓ならん)というところのおばあさんが、この人は大変の
老年でありますから、疲れていましたので、「ねえ、おばさん、水
いっぱい、すまないが、飲ましてくれませんか」といわれましたか
ら、はい、お上りなさい、これはわれわれ二ところで飲みますよ。
瓶のいっぱいはみんなに分けて飲ましていますから。ずっと遠くの
井戸に行つて汲んで来てありますから、今度は、あなたの方とうちの
子供たちのものにしますから、遠慮されないで上りなさいねえおば
あさんといつてですね。

しません、れもしませんでしたが、今度はいい人がおられて、わ
たしたち、子供たちは、物もろくろぐれでおりませんから、栄養
不良になつてぐらぐらしまして、色も青ざめていましたから、罐詰殻
持つて行つて、お菓子の入つてゐる小さいブリキ罐でしたよ。これ
持つて行つて、「うちの子供が栄養不良なつて大変疲れてもおりま
すから、まだ、味噌汁といつても飲まして見ませんので、味噌をこ
れのいっぽいは売つて下さい」といいましたら、ここは区長であり
ましたよ。比嘉・島袋の区長ということでしたが、そこのお
母さんが、「ええ、あるよ、持つて行きなさい」といわれて、お金
を取つて下さいといつたら、いよいよいわれましたから、有難うご
ざいます、といつて、おじぎを何度も繰り返してやつて、お汁を沸
かしてくれたりして、こつちで辛じて暮しておりました。

そこにいた時に水汲みに行きました、この水は一升瓶にこうして
汲みまして、歩いても歩いても道は減りません。それも人といつし
ょに行つて。そうしてずっとと行きましたら、収容所がありま
したよ。瓦葺きの家がありました、男たちがいっぽい、そこにい
られて、この方たちに、こつちに水を汲みに来ていますが、うちの
お父さん、長男などおらないかなあと思つて、さがしに来てています
がといいました。仲宗根三郎と仲宗根ヨシヲというのがいませんか
と言つたら、いいえここには誰もいないです、見なさい、そういう
うのはここにはおらないよ、といいましたから、そうですか、とい

し、また赤虫もいるが、それも気にしないで汲んで、布呂敷も持つていませんから（前の一升瓶を布呂敷に包んだというのと話がちがう、あるいは一升瓶は後のことで、この話が前のことなのかもしれません）このまま飲ましてはいけないといって、着物の裾でこしてですね、そうして飲ましていましたよ。もっとこの水がないといけないから、空きカンカンをさがして汲んで来おりましたよ。碗もありませんからね、カンカンに、これはありましたよ。濁り水で、塩はありませんでしたよ。配給でありましたか、何かわかりませんが、塩はないましたよ。そうして塩入れて、草の葉とか何とか引つちぎって来て煮て、食べました。

山原には沢山の人が行きましたよ、何千人。山原に行くと水も大変うまいというのに、一日も早く山原に連れて行ってくれればいいのにここでは水もないし食べるのもないのにね、そういうてこれだけの人数が喜んでいいわけです。ところが行って見たら草の葉もないのに、もっとひもじい毎日を送りました。着物もありませんし、着物の配給もないし、係りの人たちが廻つて来ても、自分たちの仲間は五十人ばかり来ていますが、廻ったところで荷物も持つてはおりませんから、見ても無いのでありますから、みんな裸なつているのでありますから、アメリカーのハツバヤーといいましたか、

自分たちはそれを配給するにも別の人たちより早かったと思いますよ。ハッパヤー服の配給はどこよりも早くしたと思ひます。お前たちの連中は、持っていないのだから一番早く配給してくれるよといいましたから、それでは助けて下さいと願いましたよ。

今度はこのハッパヤーを取つて、着物は裸なついてもいいですが、ズロースは着たものだけですから、女の前を隠さないわけにはいけませんよね、これをほどいて、これでズロースを縫うて着ましたですよ。はじめはわたしたち、着ているものだけですから、山の中に行つて洗つてですね、干して体は隠していましたが、鎧が鳴る音洗つてまだ濡れたままのズロースを着て作業しに行きました、ズロースは一つで暮していましたよ。洗つたら、下の方が少しでも早く乾くようにしました。上は濡れてもいいんですが、下の方が濡れないと気持ちが悪いので、そこが早く乾くように、そこを上にして日が当るよう干しましたよ。

鎧というのは、竹など切つて、長屋をつくつて入るので、みんな出て来いという作業の合図です。わたしたちの連中は、特別に着物も何も無いのでありましたから、ズロースを干している時に鎧が鳴ると、濡れたパンツを着てもせんせん恥ずかしいという気持がありませんでした。しかしながら隣の隣の連中は何もかもユチク（豊富）しているんですよ。みんなゆうゆうとしていました。わたしはマラリアにかかりましたよ。マラリアは、他の人のほどのものであつたですかわかりませんが、わたしのマラリアは呼吸もできません。悪性マラリアとか言いましたか。一番人先に罹りましたが、手から髪から、汗がチョンチョン湧き出て、食べるもの

を取つて食べましたが、家族三人、一晩中便所を行き通いして、これは食べていい、他の人が取つて来るものは、柔かくてうまいのにわたしたちの胃腸は空腹ばかりついて悪くなっているのですよ、栄養もなく、下痢して、これは食べるものでないと食べませんでした。毎日草の葉や芋蔓の葉のようなものがよかつたですよ。

仲宗根のカミさんの家族もいつしょでしたよ。あの人たちは山羊が食うアンコーチーフアーフー（ツワブキ）といって、山羊はよく食いますよ、草の葉ですよ。たしかにあれは山羊が食べても死なないから、あれを取つて来て煮て人間が食べても死にはしない筈だといつて、食べたわけですね。食べたら包丁で切る時は、大変にじ張つて切りにくかつたんですね、沸き立したのを、おばあさんおいしいですか、と訊いたら、いいえ、これは一回だけしかできない、お前たちは食べることができないよといいました。でもわたしは、わたしたちにも食べさせて下さい。と頼みました。

お前たちはこれは食べることができない。いいえ、おばあさん、わたしたちにも食べさせて下さい、といつたんですが、いいえ、これはお前たちは食べ得ない、煮てある分は食べるよ、人並みだからという。人並だからわたしたちも食べることができるんだからと食べさせて下さい、といつたが、お前たちは、これはとてもできんといつてくれませんでしたよ。お前たちはお腹が悪いのだから、できない、といつて食べさせてくれませんでした。ほんとに堅くて食べながらも、一度だけしか食べられないというぐらい大変だったのでくれなかつたんですね。

福山には一年半ぐらいいました。自分たちはヨモギの葉も当りません。山に生えているウーベー（カラムシ）の葉といつて、山羊の食うものですよ。この葉を取つて来て、潮水を海に行つて汲んで来てですよ。後では塩を売る人がいましたからこの塩を一合ずつ買って、メリケン粉の配給がありましたからこれで食べて、最初はトウモロコシを三人で湯呑み茶碗のいっぱいぐらいありました。三人分一日に一合ぐらいありました。人数の多い家族は割つて食べましたが、わたしたちは三人ですから割つたら減るかと思つてそのまま煮て食べました。水を飲んではこれを食べていましたよ。後からは草の葉を引つちぎつて来て食べて、またそれからメリケン粉がわたくつて、罐詰がわたつていましたから、ウーベーの葉をとつて来たりして食べましたよ。

海の物はわたしたちに取られるものは堅くて食べられない、これもありましたので、いっしょの人たちに、子供二人を孤児院にでこちから集めて、それを生まのままつづいて碎いてしほつて汁を飲ましてくれまして、それをくり返しておりました。後では酷くなつて、そのまま氣を失つていたことがありましたが、それがわかるようになりましたので、いっしょの人たちに、子供二人を孤児院にで入れてこれ等の命を助けてくれるように頼みました。自分じかに心配するなよ、といつてみんなで元気づけて、今度は、三男スージーのお母さんが毛布を被ぶせて、手を持ってくれて、医者の家に歩けませんでしたよ、そういうふうに何度もしましたから、それからようやくだんだんよくなりました。

わたしたちはウーベーの葉を岩のところに行つて取つて食べていました。ヨモギの葉は、茎は見つかっても、葉はもぎ取られて、みんなが取るので芽も生えません。さがしてもさがされませんでしょ、ウーベーの葉はうまかったですよ。

後になつてからはメリケン粉の配給もあつて豊かになりました。福山で一か年半ぐらい経つて、二人の子供をつれて、最初に我謝に来ました。それから棚原に来まして、今度は自分の部落に来ました。部落に来てから他の人の土地に預けられおりましたが、こつちへ来てから、七年間しかなつていませんよね、そうして戦争から、もう二十五年間なつていますよね、そうしてようやく、自分のこの土地に本建築をすることができたわけです。

註、カマさんのお話は、一応読みやすいように筆写整理してあります。それを廃棄して、独特の説教、混迷、重複の多い沖縄方言を省略しないように、共通語訳への正確さを努めた。これがより記録のたしかさを思ひ、敢えて困難なそれにした。

わたしは、これを整理し終ると、この一家について、もっと重ななことが取り落されていることを感じて、出かけて加録することにした。この後述の部分は、追録したもので、これなくては、この一家の戦争記録として、画竜点睛を歓いたうらみがあつたと思う。

追録

わたしたちのお父さん（夫のこと）も防衛隊に出て行きましたが、島尻では、どこへ行つてらなくなつてしましました。わたしは、「わたくしたちのお父さんが、わたくしたちの子も、人にあう」といふに、わたくしたちのお父さんが、「わたくしたちの子

供たちは見なかつたか、わたしたちのお母さん（妻のこと、カマさんのこと）は見なかつたか」といつて、さがしていたといふ話を聞いていましたよ。大変わしたものと心配して、道みち歩きながら、わたしがどうしているか、どうなつてゐるかといふことを、ゆきあう知つたみんなにたずねていたということをわたしは聞いていましたが、わたしもまた、小さい子供たちをつれていますよね、長男と、お父さんが兵隊と防衛隊で出でていますので、ずらつと戦争へ鉄砲を担いで出で行く兵隊を見る時には、その中に入つております。やはりわたしは人のいるところでは呼びましたよ。そうして最後まで返事はありませんでしたが、お父さんは喜屋武の岬まで行つていて、呼びますと、いますなら自分の家族の声は聞きますよね、それで、「はい」と答えるかと思つてゐるのですが、ちつとも返事がありません。また他人の家の屋敷の内に休む前にも、あつちでもこっちでもわたしは人のいるところでは呼びましたよ。そうして最後まで返事はありませんでしたが、お父さんは喜屋武の岬まで行つていて、呼ぶことはわかりました。

比嘉・島袋に行った時に、わたくしたちの村内の方が捕虜取られで、家族みんな来ていましたので、うちのお父さんをあなた方は見ませんでしたかと、姓名をわたしは言いましたら、長男は見なかつたが、お父さんはいつしょでしたので、いつしょにさあ行きましょうと言つたのでしたが、そつと逃げてどこへ行かれたかわからんと言いました。今度はまた捕虜取られてじきは、防衛隊はどこへ行くのか車からいっぱい列んで送られて行くがありましたよ。

それで毎晩、毎晩車が通るところに立つて、自分のお父さんが長男かを見るかと思つていましたが、全然行きあいませんよね。わたく

供たちは見なかつたか、わたしたちのお母さん（妻のこと、カマさんのこと）は見なかつたか」といつて、さがしていたといふ話を聞いていましたよ。大変わしたものと心配して、道みち歩きながら、わたしがどうしているか、どうなつてゐるかといふことを、ゆきあう知つたみんなにたずねていたということをわたしは聞いていましたが、わたしもまた、小さい子供たちをつれていますよね、長男と、お父さんが兵隊と防衛隊で出でていますので、ずらつと戦争へ鉄砲を担いで出で行く兵隊を見る時には、その中に入つてあります。やはりわたしは人のいるところでは呼びましたよ。そうして最後まで返事はありませんでしたが、お父さんは喜屋武の岬まで行つていて、呼びますと、いますなら自分の家族の声は聞きますよね、それで、「はい」と答えるかと思つてゐるのですが、ちつとも返事がありません。また他人の家の屋敷の内に休む前にも、あつちでもこっちでもわたしは人のいるところでは呼びましたよ。そうして最後まで返事はありませんでしたが、お父さんは喜屋武の岬まで行つていて、呼ぶことはわかりました。

比嘉・島袋に行った時に、わたくしたちの村内の方が捕虜取られで、家族みんな来ていましたので、うちのお父さんをあなた方は見ませんでしたかと、姓名をわたしは言いましたら、長男は見なかつたが、お父さんはいつしょでしたので、いつしょにさあ行きましょうと言つたのでしたが、そつと逃げてどこへ行かれたかわからんと言いました。今度はまた捕虜取られてじきは、防衛隊はどこへ行くのか車からいっぱい列んで送られて行くがありましたよ。

それで毎晩、毎晩車が通るところに立つて、自分のお父さんが長男かを見るかと思つていましたが、全然行きあいませんよね。わたく

それから、わたしが仲宗根カマという名にしてありますのはね、その時は、名は、よし子、澄子、文子といつて直そうと思えば直されたのであります。わたしは山原に一年あまりもいましたので、みんな山原にほかのお父さんたちはさがして来ましたよ。ハワイにいる人もあるて、生きている人はさがして来ました。わたしは本土にちよつといつた時に、カマという名を猿の名だといつて笑われました。カマという名は自分でもおかしいと思いますが、お父さんや長男が山原へさがしに來た時に、名が變つてみるとまごついてわからぬだろうと思つて、それでもとのまゝ、仲宗根カマにしておきました。皆は、名を直してしまつたが、わたしは直さないでおくと、山原へでもどこへでもさがして來るだらうと思つて直しませんでした。お父さんは、ハワイに行つてゐるんだといつてずっと待つてしていました。

長男は石部隊でありました。わたしたちのこの部落に石部隊がありましたよ。それから我如古へ、前方へ進んで行つて、今度は、浦添のユウドリから彈薬運びもするといふ話をきいていました。あれは現役だからやっぱり命は無い筈だと思つてましたが、お父さんは、ハワイへ行つてゐるのかな、わたしたちのお父さんは、シカ（恐がり屋のこと）であつたから、どうしても命は助かつていいだろうと思いつづけていましたが、そうして待ち兼ねていましたが、帰つて来ません。そのままになりました。

その時は年も若かつたから、働くことばかり考えましたが、煙もわたしが死んでしまつたら、男の子であつたらちゃんと登記もさせたんですが、女の子でありますからわたしも女の子に全部くれてや

ることはできませんでした。自分に登記しておいたらいでではないかと自分に入れてあります。自分が死んだら無くなるのかな、政府のものになるのかな、ともうわたしの思いはこれだけでありますよ。

末の子はまだ家に残つていますが、わたしに下さいお母さんといいますが、お前は結婚もしてゐるならくれんこともないが、お前はまだ一人だもの仕方ないよ、といつたりします。

わたしは男の子を亡くしましたので、年頃の子供を見ますと、生きていたらわたしの子供たちもあのようになつたのにといつて、一日中涙を落して二、三年の間、そうして正月になると、また正月になる、わたしは正月は来ない方がいいといつて、いつも悲しくなりました。わたしは一番やになるのは正月だな、それから泣いていました。わたしは一番やになるのは正月だな、それから何かお祭りや運動会などの見物事の時も、わたしの子供もあの年頃であったのに涙が落ちます。

三、四年の間はこんなに悲しんで過しましたが今は、この二人の子供も男勝りの孝行娘たちでこんなに家も作つて、今六十八歳になりましたが、楽な日日を送っています。女の子は嫁に行つても、後をつぐ親戚もいますので、今は心も安らかにいます。

長女の許婚であつた三良スージーの長男はですね、むこうのお母さんが、港川で見た人がいた、といつて話していられましたが、やはり帰つて来ませんでした。わたしの方もあんなに福地で亡くなりましたし、二人ともにこの戦争で亡くなりました。

長女と次男は自分が葬つたから遺骨を拾つて来ました。お父さん

ません、そのままです。

註、七〇・七・一五日追加録音のため直接仲宗根さんへ伺つた。肥沃な甘蔗畑の中のあちこちに点在する人家の一つ、蘭酒なプロック建築であつた。

仲宗根さんの話の中で奇異に思ったのは次男の死を語る場に悲嘆に堪え難いよう感嘆詞も連発され愛惜の情に涙声になつたのに、悽惨な長女の死は客観的に悲しみを現わさず話された。家を継ぐ者が親戚にいるといったのも男系尊重からの気休めの心を語るものだらう。

それから長女の許婚の三男スージー一家の場合も、八人家族中、主人、長男、次男、三男の四人が戦争犠牲になり女三人男一人が生き残り、家の中心が失われたのであつた。

仲宗根 カメ（四十六歳）主婦

お父さん（夫のこと）は、八重山徵用でおりませんでした。三男も次男といつしょに防衛隊に取られて、おりませんでした。子供は長女貞子が十四歳、次女よし子が十一歳、四男が八歳、それに三女和子が誕生。五人をひきつれていたが、親戚がみんないつしょでした。しかし与那覇・宮城では子供が熱を出して、水を汲んだり、漢法の人針灸治療をさせたりして、やっと熱を下げて、それから南風原へ、南風原から東風平へ行って、また当銘・志多伯へ、それから高嶺へ、また具志頭へ行って、また伊敷へ行ってから、また福

地へいち日さんに通つたわけ、福地で捕虜に取られた。

註、仲宗根カマさんの話はこれで終つたのでいろいろ質問をした。

子供たちをあらこちで亡くしましたので、ザーハー（困った、どうも巧くないの意）することになった。

自分の体を怪我することになりましたからね、艦砲が落ちたのか、ガジマルの後に震れていて、ひとりも残らずたたき切られました。わたしたちの親戚たら、頭から落ちて来て、親戚の女の子はこっち（頭）やられて、わたしはここやられました。

註、仲宗根さんは、左股の外がわを捲くつて見せ、つづいて、同じ左足の踵の上部の疵を示した。

それからこっちは通つていますよ。股の方は、もぎ取つて行きました。

註、股も踵の上部も、破片が左足の少し後がわから来て、股はやや円形、直径三寸くらい、そぎ取られているが、踵上は、やはり左がわから弾が来て、骨の間を通り抜けているよう疵跡で、大抵貫通は入り口が小さいが仲宗根さんの場合は、出口は小さくくぼみ、入り口は大きな疵跡である。

いつしょの連れは、アガ喜納小と次男喜納小、三良スジナー、また何というか、前の沢咲小といいうのか、太良前里小…それでアガ喜納小がやられたから、みんな散りぢりになつた。死んだのは四人ばかり、分らないよ、アメリカが来て連れて行つたからわたしは。

それから捕虜に取られて、嘉手納の海岸ばたは何というか、伊佐

浜、伊佐浜（砂辺の間違いでないかと思われる）からね、瀬嵩の山

原に行つて、そこではね、海に棄てられるんだな、海に棄てに行くんだなと思って、子供たち二人つれていたので、どうしても棄てられてはならないと考えていると、アメリカーが車に乗せて山原につけられて行つた。

ここは（股）弾取らない間は痛くありませんでしたよ。弾取つた

ので大変痛みましたよ。弾取らない間は、痛くなかったが、弾取つたらそこは真黒くしていた。

お父さんは八重山から帰つて来ません。戦死したという通知で遺骨も来ない。どこで亡くなつたか、どんな戦死か、ただ戦死というだけのしらせが来ました。

次男は防衛隊だからどこで戦死したか、わからない。三男は伊敷で亡くなつた。

長男は台湾の部隊に行つたので帰つて來た。ほかのつれて出た五人の子供は全部元氣である。帰つて來なかつたのは、お父さんと次男と三男の三人だけで、ほかのものはみんな元氣です。

註、仲宗根カマさんの談話はあまりにあつさりして、いくるので、くわしい話をして貰うために名譽所長に追加談話をして貰うこととした。そうしたら、カマさんは、仲宗根カマさんと、捕虜に取られるまでずっとといつしょであったそうで、第一回の座談会には出席していられなかつた仲宗根カマさんの話を録音して、カマさんたちの苦難の実状がカマさんによつてくわしく判明することができた。

「三男が伊敷で亡くなつた」ということも理解できなかつたが、カマさんの談話によつてその意味がわかつた。三男は防衛隊

で一線で弾薬運びをしていた時に、首に重傷を負い野戰病院で治療し、やや生命の不安からのがれたので、部落の人をさがし、具志頭で家族といつしょになり、伊敷へ行き、そこでカマさんの次男が死んだ時、再度の被弾で即死したことがカマさんによつてはつきり語られている。

伊敷で悲惨な最期を遂げる三男と南部のかつて行つたこともないところで、いつしょになることなども感動的な情景だと思うのだが、カマさんは、極めて簡単にしか、話さない。

捕虜生活、療養生活等にもいろいろの人間ドラマがあると思うのだが、訊いてもあつさりと上述のようにしか答えて下さらない。しかし仲宗根カマさんが、相當にくわしくカマさんについても語つてはいる。

長男の方が幸にも台湾に進駐した武部隊だつたらしく、復員された。その喜びなどについても、長男を迎えることなどについても、われわれも訊くことをしなかつた。翁長部落の家族として、九人家族中主人と次男、三男、の三人だけの犠牲で、誕生の乳児まで助かっているということは、他の家族に較べると、極めて幸運の一家だつたといつていいだろう。当時四十六歳だったカマさんは、もう七十一歳で、一見そう老人とはいえない若さに見えるが、翁長部落の戦争体験者としては、幸福な境遇で、戦争体験の話もし、いかにも簡単に片づけていられるのではないだろうか。四十六歳といつても女盛りの戦争未亡人である。二十五年間のい

いろいろの思いはあるが、ただ表現ができないだけであろう。

しかしカメさんの実家は、実に悲惨である。兄と妹が、独立していく戦争犠牲になつてゐるばかりでなく、父母、兄弟、姪甥一家七人が全滅している。嫁に行つていた妹だけが生き残つてゐるのみである。ところがその妹の長男（初年兵）だけが不思議に助かって、四人の子供は全滅である。

カメさんが、訊いてもくわしく戦争について語らないのも、近親のこの悲惨な戦争犠牲があるので、忘れなければ、生きていられない心の痛さに堪え抜いた結果ではないだろうかといふことも考えられる。

翁長も棚原・我謝など同様、人びとの心に戦争を語りたくない気持ちが多分に感じられる。

わたしはここで棚原字現区長宮里盛光さんを思い出す。それとともに現在沖縄においての代表的政界である平良幸市立法議員もわたしの录音筆写の原稿を見られて除外してくれと名義所長に話された由。前に書いたように、この戦争のすべての悲しみを忘れずには生きられない、お気持ちが察しられる。

城間清茂（四十七歳）

わたしの行動は、翁長から首里の識名園ですね、そこへ行って、親戚をつれていますから、墓場を開けてですね、壕にして、一方は片づけて、親戚のものたちを入れて、また右がわはわたしが入るからといって、一つの墓場を越して右がわの墓場に行つたら、こっち

ぐその銃声を耳がけて、集中して弾が落ちました。それで、わたしの子供も、その時、七歳でしたがね、四女が肋骨を破片でやられたんですよ。わたしが抱いておつたら助かりおつたんですね、ちょっとわたしが離れておる時にやられたんですね。前におる幸地の方がたは、ごはんを炊いていたんですが、全部やらされましたよ。友軍の兵隊というのは、一人だけいたのですが、敵の飛行機が飛んでいるので、しゃくにさわってやつたんでしょう。同じ部落で隣り同士のおじさんもいつしょでしたんですよ。それで、このように娘が死んでしまいましたから、面倒みて下さいといって、小城の部落に葬つたわけですがね。

それから東風平に行こうとうことで歩いていましたら、五、六名の人が直撃で当つたことがありました。そうして、東風平の世名城へ行つたら、親戚のおじさんたちがおられて、いいところだから、こっちにいるようになつてしまふ、といわれたのですが、あんまり艦砲が激しいんですからね、こっちから出でですよ、女の子なんどですよ。そうしたら、その女の子は、このおじさんについて行つたわけです。どうせおじさんといつしょだから間違いないだらうと思つたんです。そうしたら、この通る道は、あんまり避難民が多いもんだから、わしらは、与座部落に行くつもりで、このおじいさんたちは上高良に上つたらしいんですよ。わたしの女の子は、尋常小学校の二年生で数え年の九歳ですが、成人のです。

それから、与座川の前に瓦葺きの家がありまして、そこに一泊したんですがね、怪我をしたお爺さんたちが、金蠅に刺されてですね、金蠅ですよ、それに刺されても、動けないんです。金蠅は、怪

は、草履もちゃんと棺箱に並べてあって、亡くなつてそうちのないのであつたんですが、その棺箱を外へ出して入りました。そうしてから親戚のものたちも、おじさんの壕の方が多いといつて、やつて来ていつしょにおりまして、いろいろと話し合つてましたよ。それから、糸満町の座波（旧兼城村）へ行つて、座波の壕の中に五日いました。座波の区長さんの家族が入つてゐる壕でありましたよ。そしたら、区長さんの家族が非常に親切ですね、豆腐なんかも、「さあ、みなさん、上つて下さい」といつて、まるで遠くから親戚の兵隊さんが来て、こつちは陣地を作るのだからどこかへ行くようにならんですね。それでそこを出て、友寄・山川へ行つて、それから、「さあ、みなさん、上つて下さい」といつて、まるで遠くから親戚にいらして、おもむろに腰を下すよ。それで、そこを出て、友寄・山川へ行つて、座波の区長さんが入つてゐる壕でありましたよ。それから、座波の区長さんの家族が入つてゐる壕でありましたよ。そしたら、区長さんの家族が非常に親切ですね、豆腐なんかも、「さあ、みなさん、上つて下さい」といつて、まるで遠くから親戚でも來たような態度でありました。

軍からの命令でありますでしたら、区長さんが、防衛隊へ取る若い人を捜し廻つてました。それで、わたしの次男も取られました。わたしへも、あなたは幾つですか、と訊きましたが、わたしは、五十を越します、といったので、それでは、あなたはいいでしようともうことをなつて、防衛隊には取られずにのがれました。

次男が防衛隊に取られたもんですから、戻つて小城の部落に来たわけですよ。みんなびしょ濡れですからな、製糖小屋があつたんです。雨の降る間は、昔のサーター（砂糖小屋）といって、バラック建ての、そこにみんな濡れていたんですよ。その製糖小屋に、日の丸の国旗も、着物も干してあったんですが、空から飛行機が飛んでいる爆音が聞こえたもんですから、友軍の兵隊が、その音の方へ向けて、一発ぶつ放したんですよ。そうしたら、電波探知機で聞いたんでしようね、友軍の兵隊が一発撃つたかと思うと、もうすぐ

我しているところに、群らがつて止つてますが、怪我して間がなづくても、どこから来るのか、やつて来て瓶に止つて、人間を刺しますよ、汁を吸つているんでしようね。

お爺さんや、娘たちと別べつになつたんですがね、この与座川のところへ来ない前のところでしたがね、女の人が倒れてですね、死んでおるんですが、この死んでおるお母さんの乳房に二歳くらいの子供がすがつて乳を飲んでいましたが、それはまともに見ることができない、何ともいえない悲惨なものでありますよ。

それで与座川のところに一泊したら、自分の部落の方が、防衛隊から帰りにやつて来るんですよ、水飲みに。それでこの方が、「あなたの次男は真壁にやつたがな」というんです。それで、呼び戻されないかと言つたら、「もう部隊に行つてゐる筈だから、あしたやりますから」というんですね。それでわたしは、次男が来るまでわたしはこつちに待つておりますから、やつて下さいといつたんです。そうしたら、翌日、昼中待つても来ませんでしたが、暮れ方になって来ておるんですよ。わたしの次男坊ですよ。朝から出たが、今になつたというので、どうしてといつたら、あまり艦砲やいろいろの弾が激しいので、あつちに隠れ、こつちに隠れして今まで時間を取りつた、といつました。

それからまたここから出て、真壁・真栄平に行つたら、そこも艦砲が激しいもんですから、一時は、屋敷のガジマルの下に隠れておつたが、自分の部落の方がたに、非常に気の強い方がおつたんですかよ、「さあ、この家に入つて休んでいましよう」というもんですか

ら、わたしたちも、そうしましようとして、この家に入つたんですよ。向こうは上座に宿しておつたんです。わたしは下に下つておつたんですよ。

そうしましたら、このおじさんたちは、直撃当つたですね。その時、わたしの次男が見えないもんですから、わしは、そこに弾に当つて折れている柄が立つておつたもんですから、これを抜いてそこを見たら、沖縄にヒンパン（庭さきの前隠し）といつてあるでしよう、そこに体をこなめて弾をよけていたんですよ。それでわたしのが、あけて呼びかけて起したもんですから、「こっちからどこかに逃げようかお父さん」というんですね。それで、「そうしようね」といつて、荷物取りに行つたら、沢崎亀千代といつてわしらの同年がおりましたがね、この沢崎亀千代が、頭がむけてしまつてゐるんですよ。それで「城間さん、水をいっぱい下さい」というんですね。それでうちの次男がハンゴーを繩でくびつて、上に上つて、タンクから水を汲んで、それを水筒に入れた。その時飛行機は上から廻つてゐますので、息子に危いから早く下りるよういつて、その水を持って、沢崎亀千代に飲ましてから、わたしは荷物を持って行ってからまた来ます、心配しないでいなさいよ、といったなんですがね、もう行かれないんです、あんまり激しくて。真栄平の、昔は籠屋（死んだ人を墓へ運ぶ時に棺を収めて担ぐもの、厨子から転化したものだらう、その籠を入れてある小さな建物）というのがあります（茅を竹あんだものでサンドウイッチにした壁）というのがあります。

そうしたら、小波津の兄さんが、「食糧はわたしが担ぐんだから、いつしょに食べましょ」といつてくれました。わたしは、たとえ食糧は無くとも、こちから出なければいけない。港川行つたら幸でもほじくつて食べるという覚悟でしたが、小波津の兄さんは、それを察して、言つてくれたんですね。それで、わたしは次男を負ふぶして、年は十九歳ですが、わしより背丈が高いから、歩いていると、真栄平の部落はその艦砲で石垣は倒れている。この石垣を踏んで、前に上つたり下つたりして歩いているから、次男の足がこの石垣にひつかかるんですよ。「足痛いようお父さん、腰痛い痛い」と泣いてるんですよ。「我慢しなさい」とはげます。そして、そうして前の松林の中に行つたら、友軍がトラックを木の葉で擬装して守つておる。それで向こうの甘蔗畑の甘蔗を折つて来て、枕もとで碎いて汁を搾つて飲ましたら、「お父さん歩くから」といつて歩き出したんですが、まるで酔払つてゐる人のように歩いている。それでこれがい、んですよ。「お父さんは、小波津の方がたがどこへ行くか見なさいよ、もうあれを逃がせば食糧はないから」と。まあそういう具合で、五百メートルくらいはいつも後れているわけですよ。

すが、あれで壁をつくつたものがあるんですが、そこに隠れていたんですよ。そうしたら、うちの部落の方が艦砲に当つてですね、中城の方も、その方は屋取りの人でしたが、やはり艦砲にやられていました。

そうしたら、うちの二男も、背中をやられてもう倒れていますよ、前に倒れて。「清春」と名を呼びながら背中をたたいてなかなか起きない。ようやく起きて、「お父さん」と呼ぶんです。そして「戦争ですからわたしのことは諒めて下さる」というんです。それでわたしは「なぜ諒めるんだ、何でもないから頑張りなさい」とはげました。

それから、小波津の部落の方が、山の下に壕を掘つてあつたんだから、わしが行つてお願いして見よう、ここにおりなさい、わしが願つて来るからといつて、お願いしましたら、「ちようどいいところだよ城間さん、昨日わたしはこの壕を広くしてあるから」と心よく迎えて貰つて、部落の方も三名行つたんですよ。この部落の方は、島日で五時後は物がはつきり見えないような方ですよ。それでわたしは荷物を担つていると、そうだな、わたしの荷物を搁まえて、さがつてついて来てですね、戦争だから仕方がないと思ひながらも、大変だなという気持ちになりましたが、しかし捨てるわけにいきませんでしよう。それで畚の紐を搁まえさせて、いつしょにそこまで行きました。

ところが間の悪いことといふのはですね、壕の中で小波津の方は、「こちちは、あんまり艦砲がひどいから、港川へ行つて、それから東廻りして、国頭へ逃げよう」といつたんです。それで、そのままついて来てですね、戦争だから仕方がないが、さがつてついて来てですね、戦争だから仕方がないと思ひながらも、大変だなという気持ちになりましたが、しかし捨てるわけにいきませんでしよう。それで畚の紐を搁まえさせて、いつしょにそこまで行きました。

それでも小波津のお爺さんたちも、おじさんたちも行くんですね。それで、いつしょの方向へ行くのだから、わしたちも、ついて行こうといつたら、「お父さん」と次男がいつて「はい」と答えたら、「僕捕虜されたらどうしますか」といつたんです。もうその時は、アメリカ兵が來ていたので、「殺すのか」といつたら「殺しはしない」というんですね。それで次男に「殺しはしない」そうだから大丈夫だ、ついて行こう」といつてやりました。

そうしたら、少しくらいは金を持っていましたから、何かと訊くんですね、手榴弾でも持つてゐると思ったんでしよう、開けて見せると、アーモンドが取つてなくなつてました。次男は捕虜収容所で、アメリカ兵が取つてなくなつてました。次男は捕虜収容所で、「わたしはどう言えばいいかな」といつて、「防衛隊に取られたが、一日は行つたんだが逃げて來たというように返事をやりなさい」といつてやつたんです。

そうしてわしが、川の水を飲んで來るまでに、次男は連れ去られていませんでよ。それで、富里・当山に来てから、あちこち病院をさがしてもおらない。国頭に行つても、国頭にまた、久志の汀間

に船から行つたんですが、大川に来てからまた歩いて行つたんで

すがね、向こうではハワイから帰つた人が来ているんですよ。うちの部落の人ですが、その方が、「あなたの息子はハワイに来ていたから、心配ないですよ」と知られたんですよ。

久志の汀間では食糧がなくて、困りました。桑の葉ですね、あれを摘んで来て、ご飯といっしょに炊いて、またトーモロコシですね、食糧のないのさえ大変でしたが、わしはマラリアに罹つてです

ね、三回ぐらい担架で病院につれられて行つたんですよ。

そうしてうちの女の子が泣くんですよ。なぜ泣くかといつたら、隣りのおばさんが、「もう城間さんは今度は間違いない、死ぬのは間違いない」といつていたのを聞いた」というんですよ。そうして泣くもんだから、わたしは、決して自分は死ぬのではないと覚悟しておつたんですよ。

ようやくマラリアも癒つて、それから工務に仕事があるから来いといわれて工務のことをして、西原に設営隊ができて西原に帰りました。

註、夫人の記録がないのは、当時城間さんは奥さんを亡くしていられた由。

仲宗根 ウート（四十歳）主婦

主人は防衛隊に取られて行つたのでありました、アメリカが上陸してからであります。どうして繰り合したのか、ちょっと九つになる三男は、ちりぢりばらばらになつて、与那原へ行きました。

そのちりぢりになつたのは、わたしと若いおばあさんとは、持たれるだけ荷物を持っていましたので、後れてしまつたのです。それでおじいさんたちがどこへどう行つたのかわからないので、近い与那原へ行つたわけです。一つには、おじいさんたちも、与那原へ下りたのではないかという気もしたのでしたが、そこは通つた様子がありませんでした。

それでわたしは、困つたことになつたと思いました。長女が誕生になる乳呑み児を負ぶつていますので、早く家族といっしょにならなければいけない、どうしたらいだらうということになつて、考えました。「わたしだが、はなればなれになつてるので、次男の一郎か誰かが、翁長の壕に負傷している城間さんという人たちが三人いるから、わたしたちとの連絡を考え、帰つて来るにちがいない。だから、そこへ行つて、自分たちは船越へ行つてから、そこへ來るように、言い置きしておこう」。

そういうふうに考えて、おばあさんと二人で、翁長へ戻つて行くことにしました。

その時、ちょうど兵隊さんたちがいましたので、九歳の三男を預つて貰いたいと頼みました。そうしたら兵隊さんは、「おばさん、それは駄目だ、おばさんが途中でやられたら、わしらは困る」といふので、「兵隊さん、絶対に途中でやられるようなことはしない、

う考えであったことが、あとになつてはつきりわかりました。

「うちの壕は厳重にできている。近所の人たちが島尻の方へ越えて行つても、自分の壕にいて、動いてはいけない。これだけの大勢の者が、年寄り（老人）と女子供ばかりだし、島尻へ越えては却つて危い。人は殺しはしないから、アメリカ兵が来たら、手を上げて壕の外へ出るようになさいよ。わしがいれば、わしがちゃんとみんなをおさめるのだが、防衛隊も兵隊だから、帰つて来るわけにはいけない、お前がわしの代りにみんなをまとめるように、年寄りたち、子供たちのことをたのむぞ」

主人はこのようにいつてから、すぐに引っ返して行きました。主人とわたしは、同じ年で当時四十歳になつていましたが、わたしのなかには、二十歳になつて、伊計島の国民学校に教師を勤めている長男をはじめ、十九歳の長女、十七歳の次男、三男九歳、四男七歳、次女五歳、三女二歳、七人の子供ができるおりました。

長男助三郎は、現地から直接、現役に取られて、正規の現役兵になりました。

四月の二十日は、すぎていたと思いますが、われわれの翁長部落の人はほとんど、南の方へ越えてしまつて、残つてゐるのは十軒くらいでありますから預つて下さい」と

そうして運玉丘の裏を廻つて翁長へ行きました。そしたら、翁長は、アメリカ兵が入り込んで、電燈を照らしていました。それで伝言もすることができないで、すぐ引つ返しました。それでおばあさんとわたし二人は、湧川の後を越える時など、桃原廻りをして来ましたよ。

そうしたら、我謝の入口では、艦砲が落ちましたよ。その破片は大きなものでした。それでおばあさんと二人は、弾が落ちると同時に橋の下に飛び込みましたから、それで助かりました。しかし着物はばたばた濡れてしましました。与那原の兵舎に帰りましたので、二人とも濡れた着物を海に捨てて、着換えました。

「兵隊さん、命は助かつて帰つて来たよ」といつたら、「おばさん、命を助かつて來たね、途中でやられはしないかと思ったが、よかつたね、おばあさんたちは運が強いからどこへ行つても大丈夫だよ、飛行機が飛んでないから、今の中に島尻に越えなさい」兵隊さんがそうおっしゃつたから、与那原から那覇へ行く道に沿うて瓦焼きのあるところから船越の方へ向かつて歩きました。

そうしてしばらく歩きましたら、飛行機が沢山、激しく飛びましたので、茅の中に逃げ込んで、一日はそこにひそんでいましたよ。そうして夜中に歩いて船越についていました。

船越へ着いたら、おじいさんやおばあさんたちは、子供等つれて、大城部落へ行つてゐるよという話をきいたので、すぐその足で